
閻魔の日記

鳴峰東夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閻魔の日記

【Nコード】

N5523E

【作者名】

鳴峰東夜

【あらすじ】

「ちくしょお……。青春かよ。青い春かよ。俺は黒い冬かよ。」
恋愛ナシ、趣味ナシの『ただ』の高校生、俺は偶然ながらも、ある事件に巻き込まれた。しかも、それは『人を超えた力』の衝突だった。そして、そこで出会った一人の少女。

二つの組織、一つの野望、通い違う思い。 「護りたいものも、そのために犠牲になるものも、人それぞれで、何が正しいかなんてきつと、神様でも分からない」
世界を巻き込むトンデモバトルファンタジーここに！

第一章 出会いのページ

一章 「出会いのページ」

1

「……、はあああゝああゝ……」

恐ろしく重く、深く、暗いため息とともに半径1メートル程のどんよりオーラを放った獄魔^{ひとやま}。俺は、その場で校門を背に座り込んだ。そんなスーパードテンション16歳、彼女いない歴〃生きてきた時間の俺の前を、キャツキャツと騒ぐ制服姿のカップル、ハイな男子アンド女子が通り過ぎる。

「ちくしょお……、青春かよゝ。青い春かよゝ。俺は黒い冬かよゝ」
なんてことを体育座りでうずくまりながら呟く俺の肩を、誰かが叩いた。俺が頭を上げると、そこには俺の通う高校、海晴高校^{かいせいこうこう}の制服に身をつつみ、ブレザーはボタン全開、金髪、ピアスという一見不良少年を思わせる彼のクラスメイトがいた。

「ナーニ黒い呪文みたいなの唱えてんだよつ。俺」

「うっせー海老村^{えびむら}。いいなーお前は性格も名前もユカイで」

「うなっ！ 海老村^{えびむら}入鹿の何がユカイじゃッ!？」

海老村は後ずさりしながら叫ぶ。

「もうエビとイルカの時点でユカイじゃ。お前、そのうち、名前に名字喰われっぞ」

うなっ！ と頭が真っ白になる海老村を、やっぱコイツはユカイだなゝと俺は眺める。

この自毛から金色なエビイルカは、自毛から青色な俺を「色つき自毛仲間」ということで中学校の時からちよくちよくからんでくる。

俺の方にしても退屈しのぎになるので付き合ってたっている。

本心から言うとう嬉しかった。俺には友達が少なく、そして母親がいない。病気で死んだそうだが俺が2歳の頃の話なので思い出が一切無い。そして父親、こっちは生きてはいるが、大して思い出は無い。俺の父親は研究者で、家にいても地下の研究室にこもりつきりだし、そして何より、

ちよくちよく行方不明になる。

しかも、帰ってくる時はへらへらと笑いながら、お土産などを持ち帰ってくる。

ちなみに最近のお土産はシンガポールの蛇酒だった。（蛇エキスのビール）

確か、最初にキムチを持って帰ってきた時は、跳び膝蹴りを顔面にお見舞いしてやった。

そんなかなで今日の俺が黒オーラなのも昨日バカが行方不明になって、そのせいで警察にいろいろ夜中まで聞かれて疲れているからだ。

「……帰ってきたら腕ひしぎ十字固めとV1アームロックかけてやる……！」

しかも同じ手にだ！ と心の内に決意を固めていた俺の左側頭部を、通学用のカバンが直撃した。

ぐばあああ！ と受け身の出来ない姿勢だった俺は、華麗に右に吹っ飛んだ。しかも海老村、不幸なやつめ。俺の右にいたので巻き込まれやがったよ。

「だ、誰だ！？」

俺はがばっ、と起き上がり衝撃源へ目をやった。

そこには海晴高校の制服を着た、赤ずんだ黒髪をツインテールにした少女が、右手でカバンをくるくると回して立っていた。

「俺。アンタねえ……、明日からゴールデンウィークなのよ！？」

何でそんな黒オーラを放出してるわけ？ 幼なじみとして見てられなかったから活いれてやったわ！」

ツインテールの少女は猛々しい態度で言った。

「てめっ瑠璃華……！ カバンは人を吹っ飛ばすモンじゃねーんだぞ……」

知らないわよ、と言う瑠璃華を無視して俺は海老村の方を見た。

「……え、びむら……？」

海老村は気絶していた。弱すぎ。

「海老村ア……ッ！！ 死ぬな……！！」

「死なねえよ……！！」

ものすごくすごい言葉を口走った俺に、間髪入れずカバンをぶつけた瑠璃華は、ズカズカと俺に近づき俺のネクタイを掴む。

「あたしを無視するたあい度胸じゃん。俺」

「あ……？ オネエサマ？ キアラが変わっているの……ぎゃー……！！」

見事に腕ひしぎ十字固めが極まった。

「うわぎや……！ 死ぬ……！ お助け……！ お代官サマ……！！」

「さあ謝れ！ 謝れば先刻の事は水に流そう！ さあ……！！」

「謝れって俺何もしてな……ぎゃ……！！」

俺の両足はしまり、両手を広げ、まさに十字である。とその時、

「う……やられたぜ……、」

海老村が起き上がった。ちなみに入鹿の鹿は馬鹿の鹿である（俺談）

「え、海老村！？ 助けて……！！ 今こそ、真の友情をおおお……！！」

「んん？」

海老村が俺と瑠璃華を見る。寝ボケていた顔が、一瞬にして驚愕に染まった。

「な、何だよ海老村？」

「うわ……ん！ 俺が女子とイチャついてる……！！」

「違うわあ……！！」

俺と瑠璃華が、同時にカバンを海老村の顔面に投げつけた。2つ

のカバンが美しく宙を舞う。鼻血と共に。

2

ゴールデンウィーク前日の商店街は人気が無く、まだまだ春なので5時でも日はやや高かった。

「あーっ！ もう！ 何でデパート閉まってんのよ！」

「……、あの〜？」

すぐにでもデパートの窓ガラスをがち割ってしまいそうな瑠璃華に、後ろから俺は手を上げて質問する。

「なんで俺はこんなトコを、ユカイなイルカやプロレス女と一緒にねり歩いているんですかー？」

飲みかけのジュースの缶が、俺の顔面に直撃する。

「誰がプロレス女ですって？」

瑠璃華が笑顔でピクピクと顔をひきつらながら、ゆっくりと振り向く。

「……いや。絶世の美ゴリラの間違いでした」

瞬間。瑠璃華の左足による一撃が俺の髪をかする。

「だ〜れ〜がゴリラですってえええ！？」

今にも俺に襲いかかりそうに、ふーっふーっ和荒い息を立てる瑠璃華を、まあまあと海老村がおさえる。

「じよ、冗談だって。なんでいつも暴力に走るかなあお前は。そんなんじゃないやモテねーぞ」

「なっ！」

一瞬、瑠璃華から表情が消えたので、やべえ今度こそ殺される！と俺は本気で謝る。一方、瑠璃華は戦意喪失したのか海老村を振り払い、歩き始めた。

「ど、どした？」

俺がきょとした顔で尋ねる。瑠璃華は立ち止まり、

「……別に。何でもないわよ。私も買物に付き合っている身だし、迷惑だろうし……」

海老村はさておき、俺としてはあまり迷惑ではなかったのだが……

……。なので俺は俺なりにこの空気をどうにかしようと思った。

「そっか。じゃ、次どこ行く？ ストレス発散にカラオケでも行くか？」

「え？ ……いいの？」

瑠璃華が俺のほうを振り向く。驚いているのか嬉しいのかどっちか分からない、そんな顔だった。それに応えるように俺は優しく笑った。

「ああ。俺も海老村もどうせヒマだしな」

と海老村の事情をまったく無視して言っちゃった。特に深い意味は無い。

「よしっ。じゃあ。行くか」

と、その時だった。

突然、俺達の目の前のデパートの一階が爆発した。

3

うわっ！ きゃっ！ などの声と共に、デパートの近くにいた人たちが爆風に吞まれ、転がってゆく。

俺もその中の一人だった。踏ん張ろうと努力はしたが、なにせ爆発源は目の前である。災害や事故の時の対策か、割れば粉々になるガラスのお陰でケガはしなかったが、爆風だけでも相当な威力だった。俺は倒れはしたが転がりはず、地面に這いつくばった。

「瑠璃華！！ 海老村！！ 大丈夫か！？」

返事はなかった。この爆音と爆風である。耳が一時マヒしても不思議ではない。

爆風が止んだ。俺は起き上がり、二人を探す。まだ白煙が舞っているが、二人は割と近くにいた。瑠璃華は横倒しになっていて、対して海老村は……、

倒れているゴミ箱に頭を突っ込んで失神していた。

アホらしい、と思いながらも俺は、二人が安全なことを確かめるとデパートの方を向いた。今日デパートは休みだったが少ない数の従業員は中にいただろう。

俺は走った。ケガをしている人がいるかもしれない。俺はただの高校生で特別な何かがあるわけではない。だがそんなことは関係ない。ただ彼は目の前に助けを求めている人たちがいるのに、見ていないフリをして、そしてその後、動かなかった自分を後悔したくないだけである。

その正義感は、何度も、大切な人がいなくなるという悲しみを経験しているからか。

だが、それは俺がやらないといけない訳ではなかった。いや、それは俺のやるべき事ではなかったのかもしれない。

俺は煙の中、デパートの一階の真ん中のホールに立ち止まる。辺り一帯は崩れに崩れ、とても危ない状況である。

「おい！！ 誰かいなか！？ ケガとかしてないかー！！」

必死に叫ぶが返事は無い。

「くそ……、どうする……！！」

「ちよつと。なんでここにいるの？」

ふいに聞こえてきた声に、反射神経で俺は振り返った。

そこには細長い剣を抱えた少女が立っていた。

身長は俺より頭一つ小さく、小柄な体型だった。金色の短髪は前、

右、左と一ヶ所ずつ黒いリボンでまとめであり、左の方だけまとめきれしていない髪がはみ出している。瞳は鮮血のような紅で、それを囲む目の輪郭は少しだけつり上がっていて強気な性格が見え隠れしている。服はそこらの女子と変わらず、おへそを出した二枚着の黒いシャツにダボったズボンを着ていた。

その少女はたいした飾りもされていない剣を肩から降ろすと、一息ついて、

「ここは危ないから、一般人はさっさと逃げて」

「な、お前だつて一般人だろ！！ お前も逃げろよ！！」

「その必要は無いわね。さっさと敵を捕まえないといけないの」

「敵？ デパートを爆破した奴がいるのか？」

「……余計な詮索はしないでくれる？ ケガしたくなかったらさっさと逃げて」

少女は無愛想な顔を庵にぶつけて言った。

「逃げて。つてお前はどーすんだよ！？ そんなオモチャの剣で戦うつも」

刹那、少女が後ろにあった石製のキャラクターの像に剣を叩きつけた。

「なっ……！！」

像は斜めにスッパリ切り落とされた。轟音がホールに小さく響く。驚き顔で像の切り口を見つめる庵を、少女は無表情で眺める。

「分かった？ 私は逃げる必要がなくて、あなたはあな。心配してくれるんなら嬉しいけど、ここにあなたがいると私も危険になつてくるの。だから逃げて」

少女は無表情だったが、無表情だったからこそ自分を本気で心配してくれているのが、庵には分かった。

「……でも、ケガした人たちとか……、」

「大丈夫。あとで保護しとくから」

「そっか。ありがとな」

「え？」

少女は驚き顔で俺を見ている。俺はよく見ると可愛いなーとか思いつつ、

「『え?』って、え? 俺、何か失礼な事言った?」

少女はハッ、と我に返るとすぐにそっぽを向いてしまった。

「いや……なんでもない……、気にする必要は無い……」

? と頭をかしげる俺。よく耳をすましてみるとデパートの奥から騒がしい音がある。

「じゃ、私は行くから。あんたは逃げときなさいよ」

「分かった。氣をつけてな」

という言葉がかけられない程、少女はさっさと行ってしまった。

「……よし。俺もとつと退散するか。ここにいっても邪魔らしいからな」

俺も出口の方を向いて瑠璃華達の所に走った。

デパートから出てきた時、俺は異変に気づいた。あれだけ大きな爆発があつたのに関わらず、野次馬どころか瑠璃華達、いや、人がいなかった。

「……、これって……?」

普通、野次馬が来てもおかしくないし、それより警察が来るはずである。だが俺がさっきまでいたこの商店街は、まるで廃墟のように人が無かった。

「どうして……、瑠璃華達は……?」

その時、ふいにデパートの前の電器屋のガラスが目に入った。そこには、倒れたゴミ箱、デパートのカンバン、自分、

そして両手にそれぞれ拳銃と手榴弾をもった、血まみれの中年の男がデパートの入り口に立っている姿などが映っていた。

「ッ!」

俺は驚いて振り向こうとしたが、
「あゝっあゝっ！ ガキ、動くな」

血まみれの男は震える手で、だが力を込めて拳銃を俺の背中に押しあてた。

ガラスに映った手榴弾が鈍く光る。

俺は進むべきではなかったのかもしれない。

4

デパートの中は暗かった。

あの時の手榴弾のお陰で、ブレーカーが落ちたのか……、と金髪の少女は崩れたデパートの中を歩く。足元を流れる白煙はデパートの入り口へと向かっている。

「……外、かな。でも人目に触れるのはあっちにとっても不利なハズ……」

かと言って逃がすわけにもいかない。少女は振り返って白煙の流れる方へと足を進める。

俺と血だらけの男は、かれこれ15分そのままの姿勢で硬直していた。目の前のガラス越しに見える男の体は、あちこちに切り傷やワイヤーで絞めつけられたような跡があった。

「あゝっ！ くそっ！ 手間かけさせやがって、あのチビガキイ……」

あの少女の事だろうか。あの時、彼女は多分この男を倒しに行っ
たと思う。その後この男が出てきたということは……。彼女は大き
夫なのだろうか。

「……あんたがデパートを爆破したのか？」

「あゝ？ そうだよ。なんか悪いのか？」

俺は驚いた。建物ひとつ爆破すると中にいた人や、周りにいた人
がケガをしたり死んでしまったりする。実際、あのデパートにも中
に何人か人がいたろう。

建物を壊すという事は、物理的にも間接的にも多くの人を苦しめ
る結果になる。常人ならそんな事は出来ないだろう。

それをこの男は「なにか悪いのか？」と言った。

人を苦しめることに、人を殺すことに何も感じない。

俺は心の底から恐怖を感じ、そして同時に大きな怒りを感じた。

「あんた本当に、悪いことをした、って思っ
てないのか……！」

「あゝー！？ 思っ
てねえよ！ だから何だっ
つーんだ……！」

俺の中で何かが爆発した。一発殴らないと気がすまない。いや、
一発では足りなすぎる。

「てめえ……！！」

俺が右手に拳を作っ
て振り向こうとしたその瞬間だった。

「動くなっ……！」

俺の拳が止まる。

その声は俺のものではなく、男のものでもなく、透き通った女性
の声だった。

声の音源は前や後ろでも、ましてや右や左でもない。上だ。

俺と血まみれの男は紅がかった空を見上げた。

二人の前にある電器屋の屋上、そこに、

細長い剣を抱えた金髪の少女がいた。

「あなたねえ……、早く逃げろって言ったでしょ？」

少女は空いている片手で頭を掻きながら、呆れた表情で言う。しかし、その顔には少し安心したような感情が混じっていた。

俺もまた、安心した表情を浮かべて言う。

「お、俺だってけっこう心配したんだぞ！ この男にやられてしまったんじゃないかとか！」

なっ！ と少女の顔が赤くなる。

「私がこんなザコにやられる訳ないでしょ！ バカにしないでよバカ！！」

「バ、バカだと！！ お前だって敵逃がしてんじゃない！ バーカ！！」

俺は怒ったような顔をしているが内心はすごく嬉しかった。なんだかんだでこの少女のことをけっこう心配していたのだ。

(……、あれ？ なんか一人忘れているような……)

「あゝあゝあゝあゝ！！ うるぜええ！！」

俺と少女が男に注目した。ザコ呼ばわりされて少々キレ気味である。男は俺を引っ張り、盾のようにしながら頭に銃をつきつけ、

「いいか！！ 動けばコイツを殺す！ まず獲物を降ろせ！」

少女はヤレヤレとため息をついて、

はい、と

俺がいる方向に、剣を豪速球で投げてきた。プロ野球選手も驚愕のスピードである。

「えっ！？ うっそ！？ わーーーー！！」

時速200キロほどの速さで、自分目掛けて飛んでくる剣に、俺は絶叫しかできなかった。その剣は人間の神経の循環より速く、バギャン！ と俺につきつけられた銃を貫いた。

「なっ!？」

しかし、血まみれの男もそれでボーっとしているようなバカではなく、俺を引き付け手榴弾を構えた。

「あ、ガキイ……、ふざけたマネしてくれんじゃねーか……!」

「だーれがあんたみたいなの言う事聞くと思ってるの? 私は警察でも自衛隊でもないのよ。人質とったところで何も変わりはない。あんたを殺しちやいけない必要も無いし」

人質の前で容赦の無いことを言うてくれる。要はその手榴弾で二人死んでくれた方が手っ取り早いということである。「冗談でも怖い。冗談に聞こえないのだが。」

「ま、それが私たちのマニュアルなんだけど、私は殺し屋じゃないしね。私の場合は人質は放つとけないし、あんたも放つとけない。できるだけ死人はゼロにしたいの」

彼女は軽い口調で言ったが、それは彼女が一番大切にしている事というのは俺にも良く分かった。もしも、この男のように人を殺しても何も思わないような奴なら、あの時俺に「逃げろ」とは言わなかったハズである。

「で、どうすればいいの?」

「……、両手を頭の後ろに組んで座れ」

彼女は言われた通りに両手を組み、その場で女の子座りした。

俺はホッとした。もしかしたら今度は飛び蹴りー!! とか飛び頭突きー!! とかくるかも、とドキドキしていた。彼もやっぱ自分の命は惜しいので「俺はかまうな! やれー!」などは言えないのである。だが、あの少女の睨み度を考えると迷惑かけてるなーと思う。情けないことこの上なしである。

（言えません! ホントすいませんけどまだ死にたくないですまじでゴメンなさい!）

心の中で懺悔する俺に呆れ、少女が口を開いた。

「……ねえ、なんでこんな力持ってて悪い事に使うの?」

その声は悲哀と、優しさで満ちていた。

「あゝ？ 俺が何しようが勝手だろうが？」

男のその言葉に俺はムツとした。そうだ。あんな、軽い一撃で石像をスッパリ斬れる奴を出し抜くほどの腕前だ。何の動機があつてデパートを爆破したかは知らないが、それで有名人のSPとかになつたら儲かるだろうに。

少女は続ける。

「じゃあ、何で悪魔なんかと契約したの？」

……。

……。

……は？

「うつせえな。どうでもいいだろうが」

いや！！ どうでもよくない！！ 悪魔！？ あの角生えててコウモリみたいな翼のついたあの！？

えええ！？ と俺は頭の中で絶叫する。

そんな奴を脇目に、話は進む。

「……そんなに組織が大事？ 組織の為だったら自分も殺せるの？」

「ハッ。自分の為だよ。俺はよ、力が欲しいんだよ。何も恐れなくていい程の絶対の力がな」

……あの……？ 話についていけません。誰か……。説明して……。

……あ！ そうか！ ドッキリか！ なるほど！ こんな手の込んだドッキリ……。いや、俺も有名人になったもんだな……。どこに力メラあんのかな……。

「……、悲しくなってきた……」

自分の平和ボケした想像力に脱力しかけた時、俺は気がついた。少女の方から何か、音がする。チリチリと大気が振動するように、カサカサと砂が鳴るように、とても小さいが複雑に絡み合った音がする。男は気付いていない。

風？ 俺は思った。が、違う。感覚的に何かが違う。

「あんた……救えないね」

少女が悲しげに言ったその瞬間、風が、止んだ。そして同時に、

大量の羽根が辺り一面に出現した。

「なっ……………!!」

それはまるで天使の翼のような白く、微かに輝く羽根だった。

「チィ……………!! てめえ!!」

「悪いけどのんびり語り合う暇はないな」

少女は立ち上がり、こちらへ飛び降りてきた。

そんなトコから飛び降りてくるなんて、もう何でもアリだなあ！

！ この羽根もさあ!! 心の中で叫ぶ俺はふと気付いた。

男が動かない。手榴弾を使えばいいのに、それをしないどころか手榴弾を持つ手が震えてさえいる。

少女が俺と男の前に着地した。

その手が地面に突き刺さった剣に触れる。

「てめえ……………名は？」

その声に勝気はなかった。

「竜串ルナ（たつくしるな）。絶対正義組織フリーメイソンのメンバーよ」

そして、白い羽根の中で鈍い音がした。

日記にもできないような平和すぎる日々は、終わった。

第二章 再開と蜂のページ

第二章 「再開と蜂のページ」

1

『ええ。相変わらず日本のほぼ全域が低気圧に覆われ、天気が崩れやすくなっておりますのでお気をつけください』

それほど広くはなくとも、やはり一人のリビングに声は響く。ソファに座った庵の耳に、お天気お姉さんの声が壁やカーテンに反射して余計大きく入ってくる。

対する庵はテレビの方を向いてはいるものの、ぼーっとマヌケ面で上の空。

「……夢？……とは思わんけどさ、俺、今日死線をくぐったよな」
庵は呟く。

今日、彼は凶器を持った男に人質にされ、それをルナとかいう少女に助けられた。

男は彼女の剣（レイピアというらしい）の柄でみぞおちをやられてのび、彼女に連行されていった。彼女には「もうすぐ私の組織の人達が来るからさっさと帰って。それと、この件は他人に口外しない必要がある」とだけ言われた。庵は帰る前に瑠璃華と海老村を探したがいなかったたので、帰って海老村に電話を入れてみた所、

「……、なんであいつ……」

その時の会話が妙だった。あれだけの事があつたのに関わらず、その事を話しても、「あー。そんな事もあつたなー。でさ、俺、明日ヒマ？ ボウリングとか行かね？」と、そんな事どうでもいいと

言う感じだった。

俺的にはあれで24時間は話し込めるんだけどなー、と思ったが、悪魔とか天使の羽根とかフリーメ……あれ？　なんだっけ？　フリーメン？　とにかくそんなアタマノオカシイヒト的な話を話してもいいカウンセラーを教えてもらえるだけなので俺は言わなかった。

はー、と溜め息をつくとソファに倒れ込んだ。

「……俺みたいな一般人の知らないトコでいろんな事があつてんだな。……竜串ルナ、か」

俺はあの少女のことを思い出した。なぜだろう。彼女とはこれからも会う気がする。

「……気になつてる？　いやいやまさかな、何で俺が明らかに年下の……」

ふと、彼女の自分を見た時の少し安心した表情を思い出す。それは俺だったからではなく、あの立場にいれば誰にでも向ける表情だった。が、俺は内心それが嬉しいか

「だーッ！！　もうあいつのコト考えんのナシナシ！！」

俺は髪をぐしゃぐしゃと搔いてソファに顔を沈める。

「あゝ……、もう……」

その時、ピンポンとインターホンが鳴った。とにかく別のことに集中したかった俺は、ガバツと起き上がり、猛ダッシュで玄関へと向かった。

はいはいー、と俺が鍵を掛けてないドアを開けるとそこには、

黒い男の人がいた。

黒人という意味ではなく、ただ体の表面の7割以上が黒で埋められた人だった。要は黒スーツに黒革靴である。どこからどうみても昼に活動しない世界の人に見える。

第一印象、「今すぐドアを閉めた方がいい人」

俺は無言のままドアを閉めた。

「……、やっぱり家にいる時も鍵は掛けとくモンですな……」
しばらくの沈黙。

ピンポンと、またインターホンが鳴った。

「やばい。さっきのアクションで俺がイヤミな奴と見られたかも。
ドアを開けたらバーン！ って展開はヤダなあ……」

俺はぶつぶつ言いながら、しぶしぶドアをちこつとだけ開ける。

「はい……」

俺がスキマから相手を覗こうとした時、スキマに黒い人が顔をぬつと出してきた。

「おわっ！！ あの、うち仏教でいくんでえ！！ じゃあ！！」

俺はドアを閉めようとしたが、『待つて下さい奥さん！』的に黒い人がドアに靴を挟んできた。

「獄魔……俺さん、ですね……？」

「そ、そっすけど……。何スか……？」

俺は引きつった笑顔で言葉を返す。わー！！ 名前知られてるー！！
「やべ、なんか俺悪いことしましたか！？ と心はパニック中である。」

「あなたのお父さん。……について話があります」

2

俺は自分の作るコーヒーの味には自信がある。

今回のお客サマは渋キメの黒スーツおっさんなのでブラックをつかった。要はコーヒー豆に適量のお湯を注いだけである。何か悪いか。

俺は台所からテーブルに行くと黒い人にコーヒーを出し、彼の前

に座った。

黒い人はコーヒーを少しすすって、ってか黒い手袋外そうよ。

「まずは自己紹介しておきましょうか、私の名前は切坂^{きりさか}とでも呼んでください。率直に言いますとあなたのお父さんのパトロン……資金提供をしている組織の者です」

「……………」

俺は啞然としていた。あんな人当たりのよさそうで明るい父親が、まさかこんな人達と付き合っていたなんて。

「あなたのお父さんはですね、詳しくは言えないのですが、とても重要な研究をされていてね。それゆえにその技術を欲しがる国や組織、富豪から狙われていました。事実、幾度か拉致されたりしています」

「……………」

そうだろう。ある国が新兵器を研究していれば、他国はその技術を手に入れようとする。簡単な話、A君が新しく買ったオモチャを皆で取りあうと同じことだ。それを避けるには嫌でも『セキユリテ^棒』というのが必要になってくる。

切坂は続けた。

「そして今回の行方不明もそれなのですが……」

俺は思っていた。

それだけ拉致されても、変なお土産を片手に笑顔で帰ってくるぐらいだから、今回も大丈夫だろうと。

だが、

「あなたのお父さん、獄魔^{ひとやま} 蒼^{あお}さんは」
違っていた。

「ドイツのヘッセン州にて、死体で発見されました」

「……………え？」

止まった。呼吸が、思考が、全てが。

唇、手、足から血の気が引いてゆく。

自分の父親は、苦痛を息子には見せまいとしていただけだった。

何も言えない。というか何も考えきれない。

その時、インターホンが鳴った。俺は我に返り、よろめいた足で玄関へと向かう。ドアを開けようとしたが開かない。よく見たら鍵がかかっていた。俺は鍵をあけ、ドアを開ける。

ドアの向こうには、フードを被った子供がいた。フードを被っている所為で顔が見えない。子供といっても俺よりやや背が低いだけである。怪しい、とは思わなかった。今の俺にはそんなことを考えられる余裕などなかった。

「あの……何？ 大した用じゃないなら明日にしてくれないかな……」

俺は適当に答えた。

ところがその子はいきなり俺の腕をつかみ、家の外に引っ張り出した。急に手を放されたので、俺はしりもちをついてしまった。

「いった！ てめ……！」

俺は怒鳴ろうとしたが、口を手で塞がれた。

「しっ。静かに……！」

その声は聞き覚えのある女性の声だった。その子は玄関を覗き、辺りを見回してから、

「あなたを保護しに来ました」

と、ぎこちない口調で言ってフードを外した。

そこには、

とても見覚えのある金髪の少女がいた。

「あ……」

目を見開いているのは俺だけではなかった。彼女もフードの所為

で、こっちの顔までは確認してなかったらしい。

沈黙する二人。

先に口を開いたのは少女の方だった。

「よりによって……、あなたとはね……」

「な、聞き捨てならねえ！　じゃあお前はどーゆー奴が良かった！
？　言ってみ！？　怒らないから！！」

俺は立ち上がり、小言で怒鳴った。対して少女は腕を組み、

「そうねえ、科学者の息子だから、もつと頭のよさそうな人かと」

『科学者の息子』という単語に、俺は反応した。この少女に会った時に込み上げてきた元気が失せていく。

「……あのさ、お前がどうやって俺の父さんが科学者だったことを知っているのかは知らないけどさ、実はもう、俺の父さんは」

言葉はそこで区切られた。俺にはなく、少女に。

彼女は両手で俺の両肩を押さえ、俺を見つめていた。

「なんで……あなた、知ってんの……？」

その顔は驚愕と、緊張と、焦りで満ちていた。

俺は場に合わないがあまりに少女がまじまじと見つめてくるので、目を逸らして、

「今、俺ん家に来てる人に教えてもらった」

やっぱり、と少女は呟きながら俺から手を放す。

「あんたのお父さん、どうなったって？」

俺はあまり言いたくなかったが、この少女が悪意あつて聞いてきてるとは思えないので答えることにした。

「……、死体で発見されたって」

「それ、嘘よ」

……。

……。

……。

……ん？

「だから、あんたのお父さんはまだ生きている、って言っているの。」

別に、あなたを安心させようとしてるんじゃないからね。あなたは真実を知る必要があったから」

啞然。目の前の少女は本当の事を言っている、と思う。今さっき教えられたことに絶望し、それは全部ウソでした！……って、じやあ、

「じゃあ、俺にウソついた人って」

「敵。恐らくはあなたのお父さんをさらった組織」

「え？　さらわれてんの！？」

「生きてはいるけどね。いろいろ事情があるらしいから」

素直に喜んでいいのやら。とにかく、父親は生きていて、あの黒スーツおっさんは敵らしい。

「……俺はどうすりゃいい」

「まず、ここから逃げるの。多分そいつはあなたを消しに来たか、面倒な事を考えないように思考を植え付けに来たと思う。あなたはこんな事に巻き込まれる必要はないのに」

また、『逃げて』

「お前はどーすんだよ？」

少女は玄関を見ながら、

「そいつは家の中にいるんでしょ？　あなたのお父さんを助け出すための情報収集のためにも、そいつを拘束する必要がある」

「戦うのか？」

「抵抗すれば、ね」

その言葉に俺は怒った。

「そんなのダメに決まってるだろ！？　自分が戦うからお前は逃げろって、そんなんで俺が嬉しくなると思ってたのか！？　女の子一人、危険な場所に放り込んで、へらへらと平気な顔して逃げれる奴だと思ったのか！？」

「じゃあ、あんたは戦えるの？　死ねる覚悟があるの？」

「……死にたくねえよ、……それに俺はそんな特別強いわけでもない。俺なんかよりお前の方がはるかに強えよ。でも、守ってもらう

ばかりじゃいけねえだろ。俺だって何か……」

その時、ヒュンという風切り音と同時に、少女が俺を蹴り飛ばした。俺はまたしりもちをつく。

「つてえー！！ 何すん……！！」

「死んだ方がマシだった！？」

少女が俺のいた場所を指差す。そこには軍人が使うような背がギザギザになっている軍用ナイフが2本、突き刺さっていた。刺さっている角度からして家の中から飛んできたと思える。

少女は玄関を睨んでいる。

「よオよオよオ。ヒトヤマサンよオ。客をいつまで待たせん気だア？」

玄関の奥から切坂の声が響いてきた。だが、口調はさっきまでとは全く違う。

まるでもう生かす意味はないと言わんばかりに。

玄関からコツコツと足音が響く。

「なアなアなア？ 何か？ やっぱムサイ男より、ピチピチの女が良かったクチか？ ワリいなア。そこまで気イきかなかったわ」

そして、玄関から現れたのは、女性だった。

長い黒髪に黒い瞳のすごい美人だった。服装は黒スーツ、まるで切坂が変装したように全く同じものだ。

その女性は俺の方を向き、怪しい笑みを浮かべ、口を開いた。

「なアなアなア。やっぱ日本人はこーゆー女がいいか？」

「……ッー！！」

その声は確実に切坂だった。

「てめ……ッー！ 誰だ！？」

女は、女性とは思えないほど口の端をつり上げて、

「おいおいおい。決まってんだろ？ 切坂だよ。ま、偽名だがよ」
バギンと切坂の顔にヒビが入る。そして、まるで風化した岩を叩くように、割れ、剥がれ落ちてゆく。

出てきたのは青年。身長は庵より高く、灰色の混じった銀の長髪につりあがった目、つりあがった口と、とても挑発的な容姿で、服はそのままの黒スーツである。よく見ると首や首元に古傷が複数ある。

ただ見られているだけなのに、それだけで自分を殺そうとしているのが分かる。この威圧感を『殺気』というのか。

「本当の名前はなア、デッドバー・リング。ノイズの殺し屋及び幹部だ。よろしくなア」

3

すっかり夜の住宅地を照らすのは、頼りない街灯と住宅のカーテンのスキマから漏れてくる蛍光灯の光、そして綺麗な満月。その精錬された月光さえも浴びる人によってその効果は変わってくる。

後ずさりする少年には、動揺を。

金髪の少女には、勇姿を。

銀の青年には、妖異を。

海に近いせいか、匂いのある風がこの道路を吹き抜けていく。狭い道なので車が通ることはなさそうである。

「……、変装術…… あんた、その図式はどこで？」

「ああああ。多神道には無エ図式だかな。気になんのは分かるぜ」

「ノイズ…… 変装術、多神道にはない……。やっぱり、魔術……」

「あアー。フリーメーソンは魔道が嫌エだもんな。どうする？ 俺様を殺しちまうか？」

デッドバー・リングはポケットに手をつ突っ込んで答えた。挑発しているようだ。

対して、少女は冷静な顔で、

「そんなことはする必要はない」

瞬間、三人の半径二メートルぐらいまで、まるで球を作るように、あの白い羽根が出現した。デッドバーはヒュー、と口を鳴らす。

「ただ、あんたがここでコイツに何をしようとしていたのかを聞きたいだけ。……抵抗すれば私は、あんたと戦うことになる」

んー？ とデッドバーは首を傾げ、目の前にある羽根を手ではらう。そして手をポケットへと戻し、トントンと少し跳躍してから、

まるで、今すぐにでも噛み付けそうな凶暴な顔で少女を睨みつけ、

「ああああおい。教えつと思ってるのか、ああ？ ガキ、てめえが村崎を倒した奴だろ？ ハッ、抵抗だと？ ナメんな。見下してんじゃねえぞオイ」

デッドバーがポケットから右手だけを引き抜く。その手にはナイフが握られていた。

「！ ……やめ……、あぶ」

俺が叫んだ時にはもう遅く、ナイフは少女目掛けて放たれた。

その刃は幾つもの羽根を貫き、もう少女の目の前……、

で止まった。

「は……？」

あまりに予想外の出来事に、情けないほどに間の抜けた声を出してしまう。

刃に三枚の羽根をつけたナイフはあっけない程にからんと落ちた。普通ではありえない。ナイフは野球選手の放ったボールのような速さで、少女の顔面を掛けて飛んでいた。

それが、いきなり止まった。

デッドバーの口笛が響く、

「……ヘエ、衝撃吸収の付加ねエ。それで村崎の手榴弾を逃れたって訳か。」

……だが今ので三枚、俺と殺り合うには少なすぎんじゃねえの？」
デッドバーが再びポケットの手を突っ込み、抜くと、どういう原理かまたナイフが握られていた。そしてそれをさっきと同じように投げる。しかもそれを一度で終わらず、一秒に一本ぐらいの速さで繰り出す。

その全ては羽に押さえられ、空しい音を立てて落下する。

ナイフの連射が止まる頃、その数約二十本。無造作に散りばめられていた。

そして、

「おおおお。ナイフ一本辺り三枚、二十本で六十枚。ハッ、やっぱ少ねえな。俺は後八十本はいけんぜ？」

少女の出した羽根も全て、ナイフと共に落ちていた。

「……、」

「なアなアなア、降参しろよ。今、尻尾巻いて逃げんなら許してやつてもいいかもねエ」

少女は極めて無表情。

やがて一つのため息と共に出した答えは、

「目の前に殺されようとしている人がいるのに、見殺しにする必要は全く無いよ」

その瞬間、辺りに散らばった羽根が消えると同時に、少女の周りにまた羽根が出現した。

デッドバーはまた口を鳴らし、

「降参する気ナッシングってか？」

「ご生憎。私の戦いにそんな言葉ナッシング」

そして少女は何処から取り出したのか、レイピアを構え、デッドバーに突っ込む。

4

デッドバーは素早くポケットから両手一本ずつナイフを取り出し、クロスさせて少女の振り下ろしを防ぐ。鈍く鋭く響く金属音が、耳をつんざく。

「ヘエヘエヘー！！ いい筋してんじゃねーか！！ この羽根の衝撃吸収の付加で上手工事、体への抵抗をなくすことで、身体能力が100パーセントの状態で戦えるって訳か！ 上出来だぜ！！」

「グダグダと……、うるさい！！」

左、上、右、中心と少女が剣を叩き込む。デッドバーは体をくねらせ、ナイフでそれらを受け流していく。まるで、子供の遊びに付き合っているかのように笑いながら。

「ほオほオほオ。型にはまっちゃいねエが……そこは経験でカバーってか！？ カハハハハ！！ それでよく村崎を倒した

モンだ！！ あいつ、相手が子どもだからって手エ抜き過ぎたんじやねえの！？」

少女はかまわず攻撃し続ける。デッドバーはしばらく笑いながら戦っていたが、

「だが」

その声から笑いが消える。

「分かってんぜ？ その軽い身のこなしと剣を片手で振り回せるのは、この羽根のお陰なんだろ？」

「それが、何だって言うの！！」

少女が鬱陶しそうに叫んだその瞬間、

ばすん、と周りにあった羽根が全て消えた。

「なッ……!!」

そんな、と思った時にはもう遅く、少女はバランスを崩す。羽根による微妙な体の抵抗、重力、重量の調節がなくなり、その全てが衝撃となり、少女の華奢な体に一気に叩き込まれる。

少女は地面に倒れた。ただ地面に倒れるならまだしも、今さっき体に叩き込まれた衝撃が地面から跳ね返ってくる。バキメ

キッ！ という音と共に彼女の体が少し浮き、また地面へと帰っていく。

「が……!!」

少女は激痛をこらえ、立ち上がろうとした。が、デッドバーの足がそれを阻む。デッドバーの右足が少女の頭を地面へと叩き付ける。

「あがッ!!」

悲痛を嘆く少女の上で、デッドバーは笑いながら、

「よオよオオ。術一つ消されたぐらいでこれかよ？ 不思議だろ？ 何で羽根が消えちゃったのか」

少女は片目を深く閉じたまま込み上げる悲鳴を嘔み潰し、口を開いた。

「まさか……、あのナイフ、が……？」

「そオそオオ。よく分かりましたねエ。

教えてといてやる。俺の契約した悪魔『マルバス』。こいつの能力は契約者の姿形を自在に変化させる。……つっても一応制限があるだけだな。

そしてもう一つ、敵につけた刀傷は決して癒えない！ それを応用すれば、さつき『殺した』お前の羽根も消せるってこった」

「……でも、あの羽根とさっきの羽根とは少しだけ違う図式を……！」

「そう思うだろ？ でもな、これが魔道だぜ。いいだろ？ ちょっ

とした矛盾なら許されんだよ」

「……ッ！　そんな事……」

少女が羽根を出現させようとする。

だが、今度は出現さえもしなかった。

「……！」

「だーかーらーよ」

デッドバーが少女の頭から足をいったん離し、また踏み直す。

「ぐッ！」

口を切ってしまったようで、少女の口からは血が流れる。

「無駄だつつつてんだろ？　哀れだねえ。人の為に命を賭けといて、そんなに殺されるなんてな。最終的にお前は誰かを救えたのか？　今救えても、明日そいつは殺されるかもしれねえんだぞ」

少女は少年がいた場所を見る。だが、そこに少年の姿はなかった。

（よかった……。逃げてくれた……）

悲しくはなかった。むしろ嬉しさがある。

そもそもあの少年には何も期待していない。

そう、ただ人を守りたかっただけ。

そう、たとえその所為で命を落とそうとも。

それが「竜串ルナ」の意味だったから。

（まあ、こんな化け物みたいな人間同士の戦いを見たら、逃げ出すのは当たり前かな）

「お？」

少年がいないことにデッドバーも気づいたようである。

「よかったなア、ガキ。お友達は尻尾巻いて逃げてくれたようだぜ？　まア、お前の死も無駄にはなんなかった、……………かもな」

「……、かも……？」

「なアなアなア。俺がフリーメーソンがマークしてる人物に接触するのに、わざわざ一人で出向くと思ってるのか？」

「……ッ！　ま、さか……！」

確かに、「獄魔 庵」はその父の誘拐ゆえ、数多の組織にマーク

されていたハズだ。そんな中で彼に接触するとなれば、当然危険になってくる。

大は小に兼ねる。

一人より二人。

一人より数人。

デッドバー・リングは一人では来てはいなかった。

「……………ッ！」

少女が立ち上がるうとする。が、デッドバーの足がそれを拒む。

（くそ……………考えが甘かった……………！！ あいつを……………助けないと……………

！！）

「ハッ、無駄だつってんだろ」

デッドバーが鼻で笑ったその瞬間、

「う……………おオオオオオオオオオオオオ！！！」

聞き覚えのある声と同時に、誰かがデッドバーの背中に体当たりをした。予想外の出来事にデッドバーの体が吹っ飛び、家の塀にぶつかる。

重力から開放された少女の見上げた先には、一人の少年が立っていた。

「な……………、んで……………？」

特別な何かがある訳でもなく、

自分と特別な関わりがある訳でもなく、

赤の他人なのに、

赤の他人のために、

目の前に立っている少年はただ、

「俺が逃げるワケねーだろ？」

自分のためにここへ来た。

「弱いくせに……」

そう、ただ人を守りたかっただけなんだろう。

そう、たとえそのせいで命を落とそうとも、

そう、それはまるで誰かさんのような。

5

悲しいはずだ。少女は身を呈して少年を助けた。しかし少年はその思いを裏切ってここへ来たというのに、

（なのに、なんでこんなに……）

何かが溢れてくるんだろう、と少女は思った。

少年は右手に握っている金属バットを肩に置いて、

「いやー、何か戦えるモンが無いか探してて……」

「なっ……！」

少女は起き上がろうとしたが、すぐに倒れてしまった。

（……ッ！！ 脳が揺らされて、平衡感覚が麻痺してる……！！）

「お、おい。大丈夫かよ……」

「逃げて！！ そんなガラクタで倒せる相手じゃないの！！ 路地裏のケンカじゃないのよ！！」

心配して近づいてきた少年に少女は叫んだ。

自分をかばってこの少年が死ぬなんて悲しすぎる。少女は最後まで自分一人の犠牲を選んだのだ。

俺はそれが分かるからこそ、少女の言葉が気に障った。

「……、分かってるって……。あんな奴、俺がバット持って向かっていったところで、返り討ちに合うだけだった」

「じゃあ……!!」

少女は説得するつもりでいるのだが、その表情がボロボロすぎた。俺はその表情を見ても、さらに決心を固めるのみ。そう、答えは決まっていた。

「でも、どうしてもお前を護りたいんだよ」

「えあ……、」

少女の頭の中が空っぽになった。ていうかなんか顔、熱い。そういう意味じゃないと思うけど、そういう意味なんだろう。

数秒後、ハツと我に返り、首をブンブン横に振りながら、

「そ、そそ、それでも!! わた、私の事より自分の心配をしなさい!!」

少女は赤い顔のまま両目を固く閉じ、吐き捨てるように叫んだ。

あのな……、と言いかけた俺は何かを閃いた。ピーンという音が似合いそうである。

「じゃあさ」

俺は少女を指差して、

「な、何？」

「お前は俺を護ってくれ、その代わり俺がお前を護るから!」

「はア!？」

少女は条件反射的に即答した。彼女は立場上、俺を護らないといけないような立場にあるので、「お前は俺を護ってくれ」は分かるのだが、「俺がお前を護る」はさっきの言葉といい何か違うっている。それなのにこの少年ときたら、

「ちよつと待ちなさ」

「よし!! 決めた!! 俺はそれでいく!!」

「……………」

啞然。まるで小学生。もう、こいつには何を言っても無意味なんだろうな、と悟った少女は説得を諦めた。

「……、はぁ……。もう、それでいいわよ……」

少女は次々とこの少年に裏切られているのに、何故か笑微っていた。自分でも分らないくらいに。

だが、そんな平和な時間は一瞬でしかなかった。

ドスッ、という鈍い音と共に目の前の少年が倒れる。

「か……っ！！」

「……ッ！」

俺はまるで全身の力が抜けたように崩れていく。金属バットが軽い音を立てて転がる。

俺は少女の前にいたので、ちょうど少女の目の前に俺の体が転がった。

「ち、ちよっと！！ 大丈夫！！」

少年はビクともしない。少女は手を伸ばそうとしたが、それさえも出来なかった。

「……ッ。どうして……！」

「あゝアあゝアあゝア！！ クッソ！！ ナメやがつて！！ あー、いてエ……ちよっと気絶しかけたぞコラ。何で俺様がこんなクズみてエな奴にやられねーといけねーんだ。クソが」

声の持ち主はすぐそこまで来ていた。片手には血のついたナイフが握られていて、ポタポタと血が滴っている。

「……！！！」

少女は、デッドバーが少年に何をしたかはすぐに想像がついた。だが、それを認めることは難しかった。

「あんた……、何を……？」

「あ？ 別に殺しちゃいねーよ。ま、放つといったら死ぬけど。……そうか、お前からは何処刺したか見えねーか」

ほら、とデッドバーが俺を足で転がす。少女としてはデッドバーを睨み付けたいところだが、そんなことより少年の方がずっと大事である。

見えるようになった少年の背中中は血みどろだった。左脇腹にはナイフが一本刺さっていて、右肩辺りを斜めに深く斬られていた。たとえ今生きていようとあと一時間も持たないほどの重傷だ。

「あ、う……………あ……………」

少女の全身に緊張が走った。今まで、どうやって呼吸をしていたのかが分からなくなるほど息が苦しくなる。

「にしても、こいつバカだな。そのまま逃げてりゃ、もうちつと長く生きられたのに、わざわざ死ににきやがった」

デッドバーがスーツに付いたホコリをはたきながら笑いの含まれた声で言った。

「そんな事な……………」

少女がデッドバーを睨んで、叫ぼうとした時、

「そんな事ねえよ!!」

少女とデッドバーは俺の方を見た。俺は続けた。

「今日、知り……………合ったばかりだけど……………、何か、特別な関係が……………あるわけじゃ……………ないけど……………」

少年の体がゆっくりと起き上がる。傷口から血が吹き出す。だが、そんなことは関係ない。

「でも、そいつは俺の……………ために、自分を犠牲に……………したんだよ」
少年は立ち、朦朧とする目で、それでも強い眼差しでデッドバーを見た。

そして、叫ぶ。

「そんな奴を護りたい、って思うことは、そんなにくだらねえのかよッ!!」

「放つとけない……、ねエ……」

デッドバー・リングは呟いた。その右手に握られたナイフから滴る血が、彼の足元を染めてゆく。

（こいつ……、致命傷のハズなのにな……。それほど意志が強エつてコトか）

目の前に立っている少年「ひとやま獄魔 庵^{いお}」。デッドバーはある事情により、彼の命を狙っている。先程そのカタをつけた。

（ハズなんだけどなア……）

彼にとって人を一人殺すのなど気に止めることではない。

それは、彼の中の過酷な記憶ゆえのもの。

（昔に比べりゃ、今は全然殺していねえ方だ）

けど、と思う。

（こんな景色見てたら、殺したくなくなんだよなア）

今さら遅いのだが、と少し思う。

（つつても、こーゆー人間は強エンだよなア）

俺と違って、と深く思う。

（……ッ！……けっこー、傷口がマヒしてきたな……）

俺は引きつった笑みを浮かべる。それが痛みなのか、気の緩みなのかは本人にも分からない。もともと気絶していい意識にムチを打って正気にいるのだから、とにかく何かに集中していたいのだ。

ふと、足元がブレて、ガクンと左膝が落ちた。

「とつ、とつとと!!」

上手くバランスをとろうとしたが、今の体力でそれが出来る筈もなく、俺はそのまま、

立っていた。

「あ、れ？」

感覚を探してみると、左腕を誰かが支えてくれていた。

「もう……無茶しないの。あんた、死んでもおかしくない状況なのよ？」

俺の左隣、そこに立つのは金の短髪の少女。名前は「竜串^{たつくし} ルナ」。赤の他人の俺のために、自分を犠牲にしてくれた少女だ。今、俺はこの少女のために立っている。

「……へっ、倒れるワケには……、いかねえよな。……ん？」

俺は気づいた。いや、気づいてしまった。

（……、え〜と……。俺は倒れそうになって、それでルナに左腕をつかまれて……ってアレ？ れれれ？ ちょ、ルナさん？ そのポジションでそんな俺の腕を抱きしめると……ッ!! あ、当たつとる……!! イカン!! 俺の全神経をそちらに集中　ッ!!）

少女は一時、なぜ少年のの顔が赤くなったのかを考えていたが、疑問の末、ある答えにたどり着いた。

（……まさか!! 外傷による発熱!?!）

寝ときなさい、と少女が言おうとしたその時、

「……、ん？」

体のどこかがムズムズする気がする。よく神経を集中してみると、その先には……、

「……、……　ッ!?!」

へ？　と思う俺の反応はもう遅く、

少女の右フックが俺の左頬に炸裂した。

7

「がっ……む、無念……!!」

と、本当に武士かと思わせる言葉を遺言に、獄魔 俺はその場で崩れ落ちた。

少女は最初、頭に血が上っていたが、冷静になってみると……、
「……っ!!」 ゴ、ゴメン!! ケガしてるんだった!! あ、その、つい……」

と何度も謝りまくる。

（おいおいおい……こいつら馬鹿か？ 敵が目の前にいんだぞ？）

反面呆れる中、デッドバーは一つ思っていた。

「ああああ……。『平和』、ねえ……」

目の前でぎゃあぎゃあ騒いでいる二人を見ると、そう感じずにはいらなかった。

彼としても平和を壊したい訳ではない。

（だけどなア、やらねーといけなんだわ）

デッドバーは血塗れたナイフを捨て、ポケットから両手一本ずつナイフを取り出し、構える。そして間合いを開く。彼のナイフの使い方は、斬ったりすることではなく、投げることにある。投げナイフというのは丁度良く間が開いていないと、敵に刺さらない。ゆえに、せめて五、六歩間を空けておかないといけない。

目の前の二人も、戦闘態勢に入ったデッドバーに気づいたらしく、それぞれの武器を構える。

（そオそオそオ。それでいんだよ。平和なんてありえねえ。世の中な、上の奴と下の奴って区別されて、生きていかなきゃいけねえんだよ。優越、差別、怒り、嫉妬の中でなア）

デッドバーは二人を見て皮肉げに笑う。それが世界の定石だ、と言わんばかりに。

だが、そんな接戦間近な中、一人の少女が口を開いた。

「ねえ」

「あん？」

「どうしても戦わなきゃいけないのかな」

「ハア？ 決まってるだろ。弱エ奴は強エ奴に潰されて、弱エ奴は強エ奴を潰そうと努力する。ンなモンだろ？ 相手を潰さなきゃ、こっちが潰される。そんな世界だ。いつも自分の背中を狙っている奴がたんまりいんだよ。」

そんな中で『共存』なんてアホらしい意見が通ると思ってるのか。平和なんざありえねえ。そんな世界がことを知っていてなお『世の中は平和だ』なんてほざいてる奴は俺様がぶっ潰す。ム力つくんだよ」

「……確かに世界は平和とは言い切れないよ。働き口も食べ物もない人もいるし、簡単な病気で死ぬ人もいる。過剰な虐待の中で生きる子供、生まれてすぐ捨てられる赤ちゃん……。でも、だからって……ううん、だからこそ『もう平和にはならない』って決めちゃいけないよ。だから……」

「ああ、そうだな」

庵と少女は驚いてデッドバーの方を向く。対してデッドバーは威嚇的な顔ではなく、思いつめたような表情で言った。

「ああああア。結局はそういう話なんだよな。今は平和じゃねエ、それだけだ。じゃあ今から平和にすりゃ良いんだ。だって俺様はその為に動いてんだからなア」

「？ ……じゃあ何で人を殺すの？」

「……なアなアなア」デッドバーはどこか楽しそうな声で「よく言

うだろ？ 『成功に犠牲はつき物』だつてなア！！」

ズバン！ と轟音を立てて、デッドバーの両腕からナイフが放たれた。

狙いは、俺のみ。

「平和のために死ねッ！！ 獄魔 俺オオ！！」

「ッ！」

今の俺に避ける体力は無い。

「ち……、」

今の少女にかばう体力と時間は無い。

潮風吹く夜の道路で、あざやかな鮮血が舞った。

8

勝ったんだ。

俺様のナイフは狙い通りのルートを通って、敵に直撃した。

はずだったのに、

「おいおいおい……」

ターゲットは身動きがとれない。その護衛も相当なダメージがあつて、術も使えない状態で、たいした反応も出来ていなかった。
なのに、

「……なんで俺様が血イ吹いてんだア……？」

その場に居合わせたものなら誰でも、目を見開いただろう。

俺と少女に放たれたナイフは粉々に碎かれ、代わりにデッドバーの右肩が縦に切り裂かれ、血が吹き出していた。

そしてもう一つ、

「遅くなっ たな」

二人の前に背を向け立つ黒い男。

それも、デッドバーのような黒スーツの、マフィアを連想させるものではなくて、長い黒コートをひるがえすその姿はまさに

『殺し屋』

唖然、どころか恐縮さえしそうな俺に、少女は安堵の息を上げた。
「大丈夫、心配する必要ない。味方だから」

ふと、黒コートの男が俺の方を見た。まだ若い、二十歳ぐらいの青年だ。その身長は高く、姿勢は堂々としている。鋭いがしつかり開いた目、顔はすぐ整っている。だが、何よりの特徴はそのボサボサした「赤」ではない「緋」い髪にある。風が吹くたびにびくその緋い長髪は、まるで悪魔が流血したような雰囲気を出している。異常であり不思議であり、不気味な感覚を。

男は俺と目があつた瞬間に、前を向いた。

そう言えばデッドバーは？ と俺もデッドバーの方を向く。

デッドバーはまだ立ち尽くしたままだった。血を出すのが久しぶりなのか、傷口を押さえることもせず、ただボーツと吹き出してくる血を眺めている。

「……おいおいおい……何だてめエ……。痛エなアオイ。てめエドーやって周りのガード破つてきやがった……？ ……いや、もうそんな事どうでもいいな……。てめエ……。俺様の邪魔してんじゃねエぞ！！ あゝあゝア！？」

デッドバーの表情は逆転し、叫びに近い声が辺りをつんざく。
しばらくの沈黙が流れる。

デッドバーはいつもの、敵を嘲るような表情に戻り、笑いを含ん

だ声で言った。

「……まア、んなコトはどうでもいいか。別に何も変わらねえ。ただただ、殺す人間が一人増えただけなんだからなア！！」

9

誰が口を開く間もなく、戦闘は始まった。

先に動いたのはデッドバー。瞬時にナイフを二本取り出し、一本目を防いでも二本目があたるように、時間差をつけて黒コートの男に投げる。

彼のナイフは当てる場所が何処でも、当てるだけで意味がある。

つけた刃傷は絶対にいえないナイフの刺さった場所は、一生その部分に刺さった時の痛みが持続する。

傷が致命的でなくとも、『痛み』を与えるだけで、人間の動きは遅くなる。そのスキに致命傷を入れることも出来るし、運がよければ痛みでショック死してくれることもある。

要は、一撃でも当てれば勝ち、という事である。

だからこそ、デッドバーは油断していた。

だからこそ、自分へ飛んでくる何かに、反応が遅れた。

めりっ、と硬いものが肉にめり込む音が体の内側で響く。

「ぎっ……がああああっ！！」

音の後に痛みが走る。左脇腹、そこに軍用ナイフが一本、粗々しく斜めに突き刺さっていた。自分がさっき投げた中の一本である。例の図式は自分には無効にしてあるものの、やはりこれだけ図太く、背のギザギザになったナイフは、普通に刺さっても激痛は避けられ

ない。

デッドバーは震える手を、ナイフに伸ばした。引き抜く気だ。

「あがつ！　ぎぐ、げあぁぎいい！！」

ギザギザの加工部分が肉の繊維をプチプチと引きちぎる。そのたびに体が軽く痙攣する。

引き抜いたナイフを地面へ投げ捨て、前を向く。傷の度合いでいうと、俺よりひどい。だが、その威嚇的な表情は変わらない。

そう、例え、目の前の敵が無傷でも。

彼に絶望している暇などない。すぐに敵の観察へと意識を移す。

黒コートの男の手にはワイヤーが握られていた。先には近未来を連想させるような、曲線で出来た包丁サイズのナイフが付いていて、腕の少し大きめの腕時計のようなリストアクセから伸びている。多分メジャーのような伸び縮みする仕掛けなのだろう。

武器らしいものはそれ以外には見当たらない。おおよそ、そのワイヤーに何らかの図式を付加して戦うのだろう。

（それだけ分かりやいい、十分に対応できる）

デッドバーは再び、ポケットに両手をつ込む。そして、恐ろしい速さで片手を引き抜き、射出する。

黒コートの男は防ぐことなく、左へ飛んだ。そしてデッドバーへ向けてワイヤーを飛ばす。

「おっ……と！」

デッドバーは黒コートの男から離れるように横に転がった。傷がうずくが、関係ない。もはや痛みなど雑音同然だった。

転がり際にもう片方のナイフを飛ばす。そして黒コートの男がそれについて行動している間に、起き上がり、またポケットに手をつ込み、投げる。このサイクルをどんどん早くしていくことで、敵のスタミナを奪ってゆく。当てるだけで決定的な、一撃を入れるために。

だがそうはならなかった。

「なあ……？」

距離をとったはずが、目の前に黒コートの男はいた。

（いかん！ きけ……）

起き上がったのはいたものの、ナイフを構えるどころか、体勢を整えてもいない。

デッドバーは体をひねらせ、男に上段蹴りを入れる。が、黒コートの男はそれを呼んでいたのごとく、頭を落とし、デッドバーの左脇腹　ナイフの刺さっていた場所を手刀で突く。

「ぎがあああ！！」

デッドバーは激痛に耐え切れず、その場で崩れ落ちる。

黒コートの男が、ナイフを構える。トドメを刺す気だ。

そうはさせるか、とデッドバーが近くに落ちていたナイフを、彼の顔面に投げる。黒コートの男は体を反り、それを難無く避けるが、もう次のナイフが来ていた。

仕方なく後ろへ飛び、ワイヤーを構える。

「……ああああ。サスガだなア。『蜂』いい……」

ふらふらと起き上がるデッドバーから発せられた響きに、黒コートの男は少しだけ目を見開いた。

「よく分かったな……」

「当たり前えだ。その髪、そのコート、その圧倒的な強さ、まさか日本に居るとはな。……『ホネット・アグゼローク』……名前からだろ？　HORNETはスズメバチって意味だからな。……世界に恐れられている殺し屋が、何で敵にもなりかねないフリーメーソンの味方をしている？」

「お前に教えて、世界が平和になるのか？」

「ハッ。そーだな。俺に知る義務はねえや。それに、結構やられたモンだしな」

デッドバーが一步、後ずさる。それを見かねてホネットが足を進める。

「……逃がすと思っているのか」

「……一つ、教えといてやるよ。今から俺は逃げるためにあること

をする。お前しだいで犠牲者はゼロに出来るかもなア」

何を……とホネットが言い切る前に、後ろから、ばすん！ と爆発音が耳に入った。

そこらじゅうにあったナイフが、次々に爆発を繰り返している。別によほど近くで受けない限り、殺傷能力はないほどのものだったので、「それが何だ」と思ったホネットはふと、あることに気が付いた。

「！……お前……！」

獄魔 俺だ。確か彼は脇腹にデッドバーのナイフを一本受けていたはず。

少女はすぐに、俺の脇腹に手を伸ばした。

（分かっている。今、動けるのは私だけだから、最善を尽くしたい……！）

一瞬、頭に痛みが走った。

一瞬、腕が止まった。

ナイフが微かに赤くなった。

それだけで、間に合わない条件を満たしてしまった。

「くっ……！」

だが、それより早く、誰かの手がナイフに触れた。少女に顔を確認する暇はなかったが、男の掌だった。ホネットだろう。

ホネットはナイフを一気に引き抜く。俺が痛みによるショック死をしないか心配だったが、今はそれどころではない。

ホネットが引き抜いたナイフを投げ捨てようとするが、間に合わなかった。

バシュッ！ とホネットの腕が弾き飛ばされる。腕や指が吹き飛ばされることはなかったが、しばらくは使い物になりそうにない。

「ホネット！ 大丈夫！？」

「……逃げられたな。……今から忙しくなる……」
ホネットは一応デッドバーの方を見てみたが、やはりそこにデッドバーの姿はなかった。

第三章 平和と非日常のページ 1

ピー、とヤカンの吹く音で、俺は目を覚ました。
体中、寝汗でべっとり。最悪の寝覚めだ。

「……俺は……？」

ソファに寝ている、と気づくのに1秒かかった。
自分の家のリビングにいる、とさらに1秒。

そして、昨日の出来事で、さらに3秒。

「……！！」

すぐさま起き上がろうとしたが、背中に激痛が走り、ソファから
転び落ちてしまった。

「……ッ……！」

言葉にならない痛みを耐え、辺りを見回す。

何の模様もない壁紙、フローリング、ソファとテーブルのセット、
少し大きめの液晶テレビ、何処からどう見ても、生活し慣れた自分
の家だ。

「……ん？」

少し離れたキッチンの方に誰かがいる。あっちを向いて、何かを
作っているようで、誰か分からないようではあるが、その緋い長髪
はあまりにも見覚えがありすぎる気がする。……というか

「何で裸エプロン！？」

実際にはパンツにエプロンなのだが、裸エプロンの殺し屋を見て、
俺はそう叫ばずにはいられなかった。その破壊力は核ミサイルにも
対応できる、と当時の彼は語っている。

「……ん、おつ。目、覚ましたかー。いやいや、もう一生目覚めな
いんじゃないかってルナが心配してたぞー」

「俺の叫びはフルシカトかよー！」

「で、俺が『白雪姫みたいにキスしたら目覚めるかもよ？』って言
ったら、ためらうことなく、何十回もぶっちゅうしてたぞー」

「マジすか!!」

「嘘だけど?」

「てめえブツ殺す! 人の純情をもてあそ……ぐはっ! 傷口がっ!」

「ほらほら、無理に立ち上がろうとすんな。傷口は完全に塞がってないんだぞ」

のたうつ庵を見て、裸エプロンの殺し屋は駆け寄って、丁寧にソファに寝かせてくれた。ちくしょう、この右手が動けば。

「ああ、ちなみにパンツ一丁なのは、着替えがないからだ」

「ああ、そうですか……」

「お前は一体何者だ?」

男二人でのムサイ食卓での第一声はそれだった。

「はあ? 俺のセリフだろ? それ。あんたは一体、何者なんだ」

庵がそう言い返すと、ホネットはラーメンをすすり、口を開いた。「順を追って説明しようか。まずは……、俺たちの組織について」

「あ、えーとフリー……」

「『絶対正義組織』な。世界平和と人類愛を掲げる、世界規模の平和主義団体だ。世界各地に『グランド・ロッジ』と呼ばれる支部を配置してて、本部は……言えないが」

平和……。何か引つかかるような……。

「……ん? 待て。お前確か殺し屋だろ? 平和を掲げてる組織にとって、人殺しって……」

「違うな」

ホネットはきっぱりと答えた。すでにラーメンは食べ終えている。だが、それより目が奪われるのは、その金の眼光。ただ、まじまじと見つめられているだけなのに、見えないものに押しつぶされそうになる。

ホネットは押しつぶすような声で続けた。

「お前ら一般人は『殺人』ってのが、人間の一番の罪だと思ってんだろうな。実際、俺もそうだと思う。見方の違いだ。……そうだな、『走れメロス』って知ってるか？ その物語の中で、主人公メロスが、王様を殺そうとするんだ。なぜ殺そうとしたか分かるか？ その王様がたくさんの人間を殺したからだよ」

俺は、何も言えない。

「『殺人』ってのが一番の罪なら、それを犯した人間は、どうなる？ ……たいてい死刑だろ？ 分かるか。俺やルナのような立場の人間は、死刑を執行する立場の人間にあるんだ」

「……………」

突きつけられた事実。人殺しを正当化する、正義。

「でも……………！ だけど……………」

その先が言えない。いや、言葉がない。

ただ必死に言葉を探す俺に、ホネットは優しく言った。

「受け入れられないのは分かる。今だってルナはそうだしな」

「……………あ」

「ま、それが殺し屋とかのマニュアルなんだけど、私は殺し屋でもないしね。私の場合は人質は放つとけないし、あんたも放つとけない。できるだけ死人はゼロにしたいの」

俺はあのとときの少女の言葉を思い出す。彼女には彼女なりの思いがあった。たとえどんな救いようのない人間でも、できるだけ『殺す』ことはしたくなかった。いや、しなかった。できるだけ、他に道を拓こうとしていた。

ホネットの言う「立場」の人間が全て、人殺しを正当化しているわけではない、ということが分かっただけでも、俺は安心できた。

「話を戻すぞ」ホネットが言う「とは言っても、『絶対正義組織』^{フリーメイソン}の人間が全て、俺みたいなのをしてるんじゃないからねー。どっちかつつと、極少数人だ。大半の『団員』^{メイソン}はお前みたいな平和ボケした奴等さ。ちなみに、ルナの羽根みたいな常識外れな能力持って

るのもつと少ない。五十万人に一人、ぐらいか」

「……そういえば、あいつやデッドバーが『まどー』とか『たしんと』とか言ってたけど……それ、何？」

んー、とホネットが首をかしげながら、ラーメンの器を台所に持っていく。

「そこが一番、説明しにくいんだよな……」

「はあ？ 順を追って話すって言ったじゃんかよ。説明しろよ」

「……よし！」

ビシッ、とホネットが庵を指差す。

「めんどいから、ルナに訊け！」

2

「……なあ、俺が悪いのか？」

「……じゃあ自分は悪くないと？」

「イヤ、そういうことじゃなくて……」

俺はどうしようもないこの雰囲気はどうにかしようと必死だ。それでも目の前の少女は、今すぐにでも怒りが爆発できますよ、と言わんばかりである。

……というか、ずーっとこのポジションでいいのでしょーか？

「いい訳ないでしょッ！！ はやくどっか行け！！」

「ハイッ！！ すいませんでしたー！！」

その言葉を捨て台詞に、俺はその場から逃げるように立ち去る。

「ちくしょう……！！ ホネットのヤロー……！！」

事の始まりはホネットだった。

「俺、今から仕事だから。残りは全・部・ルナに訊いてー。あ、大丈夫、人殺しの仕事じゃねーから」

と言われ、俺は少女を探すことになったのだが、その前にこの寝汗ベツトベツトの体をどうにかせねばと思い、風呂場のドアを開けたが最後。

「女の子が先取りしましたー」

「……誰に説明してんの？」

……そして、その場から追い出され、今の状況に陥る、と言う訳である。

俺は廊下の壁に頭をつけ、うな垂れる。

「……やべえって絶対……！！ 殺される、ぜってー殺される」

今まで何の変哲もない人生だったなあ、もっとハシャいでれば良かった、と16歳にして自分の人生を振り返ってみる。

と、その時、誰かが俺の肩を叩いた。

「……ッ……！」

全身に緊張が走る。蛇に睨まれた蛙の気持ちがあった気がする。

俺は、ホラー映画の振り返るシーンのように、ゆっくり、ゆっくりと恐怖を味わうように振り返る。

そこには案の定、嵐の前の静けさのように沈黙し、顔を伏せている金髪の少女がいた。

沈黙。

俺的には怒り飛ばしてくれた方がよかったのだが、目の前の少女はそれはしない。ただこれから起きるであろう恐怖を俺に想像させている、というカンジだ。

「……、」

「……あのーっ……」

「動機は？」

「はっ！ えーと、出来心で……じゃない！！ お前を探そうと思っただけ、その前にシャワーを浴びようと思った……」

「……そう。で、何で私を探してたの？」

「ホネットに組織とかの説明を聞いてて、あいつ、途中からめんどくさいとか言ってる」

「私に振ったと」

「イエス」

すると少女は、そ、とだけ言ってるリビングに向かう。

「ゆ、許してくれんのか？」

「別に悪気があったわけじゃないんだし、怒る必要はないよ」

その言葉に、俺は心底安心した。意外と優しい奴なのかな、この少女を鬼みたいに思っていた自分を恥じる。

リビングに付くと、少女はまだ洗われていないラーメンを器を見て「お昼御飯、インスタントラーメンだったの？ 怪我だって完全に治ってないんだから、もっと栄養のあるものを摂らないと。冷蔵庫、見ていい？」

「ん？ ああ、いいけど、でも……」

少女は冷蔵庫を開けると絶句した。

「……グロいお酒以外、何も入ってないじゃん」

「まあ、俺も普段、コンビ二弁当で済ませてるし。後グロいのは親父のお土産だ」

「やっぱり科学者って変わってるね……」

「拉致されてもへらへらして帰ってくるし」

「うん、まあ、とにかく」

ボタン、と冷蔵庫を閉めると少女は言った。

「材料がないと料理できないから、買出しに行ってくる」

「あつ、俺も行く」

「だ、か、ら、ケガが完治してないんだって」

「大丈夫、大丈夫。それに、お前も結構やられてたじゃん」

「あれはただの脳震盪、あのあとすぐに直ったよ」

「うっ」

「うっ、じゃない」

その時インターホンが鳴った。刹那、少女が俺の頭をつかみ、床に押し付けた。多分、「敵の襲撃だった場合」に備えての行動なのだろうが、それでも顔を床に本気で叩きつけなくてもいいと思う。鼻血が出そうなくらい痛いんですが。

しん、と静まり返るリビング。

「……俺が見てく」

「私が見てくる。そこで待ってて」

少女はささー、と手馴れた足取りで玄関へ向かう。向こうからは「はいー」とか「どうぞー」とか聞こえてくる。意外に、ちゃんと接待しているようだ。

少しして、少女がリビングに戻ってきて、お友達、と玄関を指差して言った。

「友達？ 海老村かな」

「さあ。待つてるよ、早く」

「ん、ああ」

そういえば今日からゴールデンウィークだもんなー、とか思いつつ、俺が玄関に行くと、そこには、少し予想外な人がいた。

「瑠璃華？ そしてなぜにゴキゲンナメな顔？」

何故か俺を睨んでくるワンピースにブラウス姿のツインテールの少女は、少し顔を赤くして口を開いた。

「……どうでもいいけど、さっきの子誰？ ……どうでもいいけど、さっきの子誰！？ どうでもいいけど！！！」

「なぜ繰り返す！？」

「いいから！ さっきの子誰！？」

「え？ イヤ別に……、ただの知り合い？」

それを言った時、俺の背中に何か殺気のようなものが突き刺さった。ええ！？ なんで！？ と心の中で絶叫する俺だが、顔には出さないでおく。

「へえ……そうなんだ……。じゃあ、何でこんな朝からアンタの家にいる訳？」

「え！？ え〜とですねー！！ ってか今、朝なの！？」

「7時だけど」

「7時！？」

確かに、男子高校生の家に朝っぱらから女の子がいれば不自然だと、言うかなんかいろいろと心配だ。

俺はベストアンサーを探すが一向に見つからない。しかも時間がたつほどに怪しきは倍増していく。

「ねえ！ 一体なんでなのよ！？」

「……実に言いにくいことなんだけどな、実は生き別れた妹が昨日帰ってきた」

「嘘つくなっ！！」

そう言われれば、瑠璃華は俺の昔からの幼馴染みなので、その手の嘘は通じない。と言うかただ俺は話を逸らしたいだけである。

「なあ……、もう、どうでもよくね？」

「いいと思ってるの、アンタ」

「ってか、お前は何しに来たんだよ。こんな朝から」

うつ、と何故か瑠璃華は顔をひきつらせて、視線を逸らす。そして、唇を尖らせて、パクパクと動かしている。

「いやいや、何か用があつて来たんだろ？」

「……、……あの今日、休み、だし……。き、昨日もなんだかんだで何も、出来なかったし……。だから……」

「だから？」

「ッー！！ ききよつ、今日遊ぼうかなー！！ ってー！！」

いきなり声を張り上げられたので、俺は少し後ずさりしてしまう。

「え、いや、……別にいいけど」

「あ、え？ そう！？ え〜とじゃあ最初、何処行く！？」

「どこに、……って、決めてなかったのかよ」

「し、仕方ないでしょ！ 今日あんたが遊んでくれるかも分かんなかったのに……！」

それを言っただけなのに、瑠璃華は俯いてしまった。よほど俺が遊

んでくれるか心配だったのか。

(……へえ、結構可愛いトコあんじゃん。いつもは暴力的なんですけどね)

「ああ、それなら大丈夫だぞ。俺、ほぼいつもフリーだから」

「……え、そうなの？　じゃあ、明日も遊んでいい？」

「もち。んで何処行く？　やっぱゲーセン？　でも俺、財布がピンチなんだよな」

「う、うん！　でも私は洋服を買いにいきたくないな」

「あ、じゃあ最近、隣町に出来たあの店に」
平和だ。

昨日、いろいろあつたりしたけど、ホネットはすごい強かったし、親父もすぐ助け出してくれるだろう。

そう、俺はこっち側の人間なのだ。

あんな、意味の分からない不思議な力を駆使して戦い合うような、そんな世界には不釣り合いな人間なのだ。きっと、こうやって適当に友達と喋って、遊んで、また明日って言って家に帰って、風呂に入って飯食って、明日のために寝て……。そんな日々が似合う、平和な人間なのだ。そう、「平和」な世界の住民なのだ。だから、自分が平和に過ごして何が悪い。だつて

(どうせ俺がしゃばったところで、誰も救えない)

逆に、誰かを傷つけてしまう。あの時は言わなかったが、ホネットは多分左利きではないと思う。それなのに、震える手で箸を握っていたのは恐らく、昨日俺を助けた時に右手にダメージを負ったからだろう。あの少女だって、自分と関わらなければ、あんな怪我をしないで済んだ。

全て自分が悪いのか。

自分の所為で、自分を護ろうとしてくれる人達が傷ついて。それなのに誰も自分のことを責めなくて。

(……はは、どうしてこんなに考えなくちゃいけないのかなあ……)

こんなに抱え込むぐらいならいつそ、関わりたくない。

こんなことなら、いつそ誰かに任せたい。

自分が何かしたところで、誰も救えないのなら、いつそ、何も知らないでいよう。何も考えないでいよう。誰かに任せて

いつその事、平和な世界にいよう。

「よし、じゃあ行」

そういつて俺が靴を履こうとしたとき、何かが俺の腕を掴む。廊下の方を見ると、そこには金髪の少女がいた。そういえば外出禁止とか言われたようななんとか、と俺が構えていると、まるで予想範囲を超えた 要は予想外な言葉が発せられた。

「買い物、付き合ってくれるんでしょ？」

……え？

「と、言うか、この人は何なの？ 不用意に他人と接触しない必要があるんだけど。この人があんたに危害を加える可能性だってあるんだから」

「でも、友達だし……」

瞬間、少女がすごい音を立てて、足を床に叩きつける。その顔は怒りなのか、少し赤い。

「いいから行くのッ!!」

「はい!!」

「……って、ちょ、ちょっと待ちなさいよ!! 俺は私と遊ぶんだから!!」

と、さっきからポカンと二人を眺めていた瑠璃華が我に返って、話しに割り込んできた。

「部外者は黙っててくれる？ あなたはこいつの置かれた立場を理

解していない。出来れば帰ってくれるかな」

「ぶ、部外者ですって！？ 立場とか関係ないでしょ！？ 大体ア
ンタは一体何なのよ！？」

「何って、絶対正義組織フリーメーソンのメーソン『竜串ルナ』よ。
わかったら帰って。こいつは私と買い物に行く約束があるんだから」
約束はしてませんし、そもそもあんた付いてくんなって言ったじ
やないですか。ってか、そのフリーメーソンでの、堂々と公言して
いいんですか？ と俺は思う。確かに、先に遊びに行く、って言っ
たのは瑠璃華の方なのだが、この少女はそんなこ
とはどうでもいいのだろう。

「あーっも！ 分かんない！ とにかく、私が俺と遊びに行くんだ
から！！」

「私は遊ぶんじゃない！ 食料を調達しに行くの！！」

俺が少しだけ楽しそうに傍観しているこの戦いも、どんどんヒー
トアップしていき、ついにはその傍観者にまでその矛先は向けられ
た。

「「あんたはどっちなの！？」」

「えっ？」

「だから、あたしと遊ぶか」

「私と買い物に行くのか」

どっちなの！？ と二人が俺に詰め寄る。恐らく、二人ともどっ
ちかを選んで欲しい訳であるのだが、どこまでも平和を味わってい
たい俺としては、この選択でどちらかを選ぶことは出来ないので、
だがしかしどちらかを選ばなければ何か、死ぬような気がした。

「……じゃあ、俺は……」

二人は息を飲む。一人の少年は冷や汗をたらし、生つばを飲み込
に、殺されないことを祈って、

「……ッ！！ 逃げます！！」

え、と二人が驚くヒマもなく、いおは速攻でドアを開け、青い空
へと全力疾走し始めた。

その後、体格の割に恐ろしく足が速い金髪の少女に俺が取り押さえられたのは言うまでもない。

第三章 平和と非日常のページ 2

3

信号のない道路、芝生のある広い庭を持つ家、広い公園には噴水もあるが、今はまだ出ていない。

ここは日本ではない。世界一の経済力を持ち、世界一外国との接触が多い国、アメリカだ。

その都市部のニューヨーク、そのビル街の下、デッドバー・リングは立っていた。

辺りはゴールデンウィークと言う事も忘れていようにいそいそと歩く通勤者でいっぱいだ。車道なら何も込んでいないのだが、歩道が多い。歩行者どころか最近では自転車通勤する人が増えてきた。デッドバーとしても、人の多い場所は好ましくない。バスを待っているのだ。いつもなら車で移動するのだが、彼は昨日、日本で力々に相当なダメージを負っていて、とても運転できる状態ではない。それも、会社に行くまでの話、なのだが。

「……ああああ、いつてえな……、マルバスの治療も俺のカーズがそっち系じゃねえからまともに出来てねえ。つか、バスおせーんだよ。今何時だア？」

デッドバーが時計を探そうと顔を上げると、ちょうどCMを流しているビルのディスプレイの隅のほうに時計がついていた。

午前五時十分。簡単に計算すると、日本は八時ぐらいだろうか。

（……つたく、面倒事になる前に「獄魔^{ひとやま} 庵^{いお}」は消しておきたかったんだけどなア。ま、あの傷だったら死んでるだろ。多分、な）

そんなことを考えているうちにバスが来た。郊外行きのバスなので、少しボロいスクールバスサイズのものだ。その郊外の工場地帯、その「ノイズ」と言う電気会社の工場に彼は用がある。

降りてくる人間は少なかった。確かに、普通郊外から都市部への

通勤者程度しかここ、ニューヨークのビル街に用のある人間はいないだろう。まあ、ルートが逆でも乗客は少ないのだが。

乗客はデッドバーだけだった。こっちの方が落ち着く、とデッドバーはドアに一番近い席に座り、歩道の通勤者たちを見る。

「ゴールデンウィーク、つーのに皆さん忙しいのな」

「それを言う、兄ちゃんも忙しいんじゃないのかい？」

デッドバーは独り言のつもりだったが、斜め前にいる運転手に聞こえたらしく、返事を返してきた。

「にしても兄ちゃん、スーツなんか着て、郊外に何の用だい？」

声の枯れた、定年も近いような男性の老人は、デッドバー・リングと言う人間を知らない。だからこう淡々と喋れるのだ。

デッドバー・リング。表向きは大手の電気会社「ノイズ」の社員、だが裏向きはマフィアの中では最大規模を誇る「悪魔教団侵略雑音」の重鎮。いまはその表の顔でいるつもりなのだが、普通ではありえないものが彼を纏っていた。

魔力。

その言葉を聞いたらず「魔法を使う時に必要な力」と思うだろうが、今のそれは違う。文字通り、魔の力だ。触れれば皮膚が裂け、肉が弾け、骨が粉々になり、例えば呼吸がおかしくなり、脳が犯されるような、そんな力。

それだけが、裏の顔だった。

別にこんな老人のために放っている訳ではない。いや、実際に放っているのはデッドバーではない。

「そうだな」デッドバーは窓越しに朝空を見て、「焚きつけた火にはもっと燃えてもらわねーといけねーからな」

その顔は笑っているのか。睨んでいたのか。

電気会社「ノイズ」と言えば、その爆発的な売上が国内に収まらず、ヨーロッパやアジアなどにチェーン会社をショットガンのように撃ち出した事で有名だ。ほぼ全ての電気製品に手をかけていて、しかもその売上は他社とは一桁や二桁違う、言うなれば超大手の電器メーカーだ。

だが、この会社には一般人は当然、親密な会社も、さらには国の上層部の人間も大半は知らない「もう一つの顔」がある。

『^{ノイズ}悪魔教団侵略雑音』

悪魔学を中心として魔女学、墮天学と様々な『^{カース}魔力』を使用する図式『魔法』を使う戦闘集団。ほとんど全てのテロ、軍事衝突は裏で彼らの力が働いている。それも、全て悪い方向にしているのではなく、ある程度の『限度』をつけるのも彼らの仕事とも言える。

トラブルの原因をよく作ることから『^{トリックスターズ}トラブルを起こす者達』と言われる。『^{フリーメン}平和を守ろう団体』とは対極の存在。実際に両者は対立していて、しょっちゅう衝突している。

そう、『いたずら者』は『正義の味方』とは対極の存在。だが、デッドバーはそう考えてはいない。なぜなら、彼もまた平和を望んでいるからだ。

ただ、やり方が違うだけ。

元々、『トリックスター』と言う者たちは、世の中に混乱をもたらし、そして人間たち、神話上では神々たちに、互いを信じさせ、社会関係を再確認させる役回りの者たちだ。

トラブルを起こした所為で仲間はずれにされても、遠くから人間や神々の世が平和になって行くのを笑って眺めていただろう。そう、たとえ自分は仲間はずれでも。

デッドバーはそれになりたい。

自分がその輪に入れなくても、平和を創りたい。いくら何千万の犠牲を出したとしても、その先の未来で誰も犠

牲のない世界が出来上がることを祈りながら、

そう、未来の子供達のためにも、

未来の人々がこの役回りにならぬように、この代ですべての混乱が終わるように、

「戦争を起こす」

4

俺はちよつとレトロな電車の中にいる。

あの後、最終的に「皆で一緒に買い物に行きましょう！」と言う俺の提案により、その場は収まったのだが、よく考えればゴールデンウィークで商店街は休みだし、年中無休のデパートは昨日半壊したしで、どうしようか？ と二人に聞いてみたところ、

「「あんたが言ったんだから、責任とつて考えろ」」

と言う事だったので、病み上がりの体を引きずって、隣町のショッピングセンターに行くことにしたのだ。

だが、一難去ってまた一難。

「ちよ、押してこないでよ！」

「そっちが押してる。後、仮に私が押していても私が詰める必要はない。あなたが立てばいい」

「なな、何ですって！？ あなたが立ちなさいよ！ 何で前の席が空いているのに、そこに座らないのよ！？」

「そう言うなら、あなたが座ればいい。私も二人用の席に三人で座るのは窮屈だと思っていたし」

「あーっ！ 何でそう上から目線なの！？ あなたが座りなさいよ！」

そう、何故か俺の座っている二人用の席には俺を挟むように二人

の少女が座っている。正直狭い。

隣の人達は、どっちが空いている前の席に座るかで言い争っていて気づかないのだが、俺はすごく恥ずかしかった。金髪の少女は文句なしの美少女で、瑠璃華も可愛い方に入るので、もちろんそんな女の子たちに囲まれている俺は、通り過ぎる男子には本当に殺気の籠った目で睨まれるし、中年男性からはチラ見の連続（見られるのは二人の少女のみ）だし、女子からは小言で「すごい」とか「何？ 今、二股がバレたところ？」とか言われるしで、もうさんざんである。しかも、恋愛経験乏しい俺にとっては、この状況は刺激が強すぎる。

「いいから、あなたが座」

「だーっ！！ 俺が座る！！」

俺は立ち上がり、70センチほどの距離をずかずかと歩いていく。その背中を二人の少女は口を開いたまま眺めていた。

「わーっ、この服イイかも！ どう庵！？」

「え？ いや、俺に聞かれてもなー。でも、いいんじゃないの？」

庵達は今、まだ真新しいショッピングセンターの中にいる。ここは二階の女子向けの小奇麗にキラキラした服屋だ。このショッピングセンター、ボロボロの工場を取り壊して出来たもので、なかなか広く、二ヶ月前に出来たのでなかなか時代に沿ったものが揃っている。だから、普通に客も多く、今日からの一週間にかけてはゴールデンウィークなので、熱気あふれるワールドカップの観客席のように込んでいる。……と言うことは、庵とこの二人の美少女達は、ここまで来るまでもたくさんの人に見られた訳であって、

（……俺は何にもしていないのに、何で同年代の男子共から睨まれたり、舌打ちされなきゃならないのですかー！？）

「んー……、あつ！ この服もイイ！ 買おっかな」

一人だけ自分の世界に入って、ウィンドウショッピングを続ける女子高生を脇に、少女が庵に話しかけた。

「……そう言えば、まだ説明してなかったね。いろいろと」

「ん？ ああ」

「このことを知れば、あなたは巻き込まれることになる。この事件だけでなく、これから起こることにも。それでも、こちら側の世界に深入りできるの？」

庵は少し戸惑う。自分は平和な世界にいたい。こういう『死と隣り合わせ』なものに関わるのはこれっきりにしたい。

だが、それ以上にこの少女の役に立ちたい、と言う気持ちが庵にある。だから、知る必要がある。もしかしたら、それは好奇心から来るものかもしれない。

俺は、一息ついて、しつかり頷いた。

そして、物語は始まる。

「この世にはいろんな『人をこえた力』があつて大きく分けると、神の御業『神術』と魔の法術『魔術』。神術って言うのは既に魂になつてゐる神や、天界にゐる神や天使などとリンクして、その力の一部を使わせてもらう能力のことちからで、これが『人を超えた力』の王道。全ての人が一人ひとりそれぞれの神や天使とリンクできる可能性を持つて生まれてくるんだけど、一生の内にその能力が覚醒する人は少ない。……これが、『絶対正義組織』の執行部隊『フリーメイソンハントメイソン』のほとんどが使う能力よ」

「……あの羽根も、その神術つてやつなのか？」

「そう、北欧神話の戦乙女『ヴァルキュリア』の『ロセンスデコレ無重鎧の羽飾り』、私ぴつたりの図式よ」

戦乙女、と言う響きに『本当にぴつたりだ』と俺は思ったが、こはあえて言わないでおく。

「次に、『魔術』ね。主として悪魔や堕天使、あと鬼も入るかな。とにかくダークなイメージがあるものは大体こつちのものだと考えていい。魔術はそういう者達を呼び出し、契約して、自分の体と結びつけるの。取り込む、つて言つた方が分かりやすいかも。で、その能力を使う、つて言うものなんだけど、この魔術にはメリットとデメリットがあるの。メリットとしては、少しの知識と意志があれば、誰でもその能力を使うことができるの」

「はあ？　じゃあ皆やつてんじゃないん」

「最後まで聞け。それが魔術の魅力的な部分。次にデメリットの方なんだけど、寿命が縮む、とまでは言わないけど、常に死と隣り合わせになるの。これが魔術を誰でもやっていない理由の一つね。あ、あと『仏法』つて言う派があるけど、そつちは今回のことに関係ないかな。とにかくこれが、数多くの犯罪者や殺し屋、一番大きいのは『悪魔教団侵略雑音』ノイズが使つてゐるものよ」

「『ノイズ』……、ん？　あつ！　なあ、ノイズつて確か電器会社

じゃなかったっけ？」

「そうだけど、あくまでそれは表向きの顔。裏では人殺しも平気でやれるテロ組織よ」

テロ。俺は昨日のことを思い出す。デッドバー・リング。人を殺しても何も感じない。罪悪感がなければ、満足感や優越感もない、まるで腕に虫がいたから叩き殺した、と言っているような、そこに何の感情もない行動。そんなものに武器を持たせれば、その先には殺戮しかないのは当たり前だ。

「……、あ、そういえばさ、『まどー』とか『たしんとー』とかって何？」

「『魔術』『神術』は能力を発動する設計図みたいなもの。図式って呼ばれてる。実際に能力が具象するのを『魔法』『神法』、それを発現するために能力に組み込む燃料みたいなものを『魔力』『神力』、『魔の思想・生き方』を『魔道』、『神の教え・そのものの道』を『神道』、また北欧神話や日本の多神教のように、この世には『八百万の神』^{やあやうす}がいる、っていう思想を『多神道』。ここら辺のことは少し難しいかもしれないから、無理に理解する必要はないかな」

「うつむ……、」

要は理科的に『道』と言う考え方を元に、『術』と言う仮説を立て、『力』と言う素材を使って実験してみたところ、『法』と言う現象が起きました。……ということなんだろうか。

「あとは『絶対正義組織』^{フリーメーソン}と『悪魔教団侵略雑音』^{ノイズ}、この二つの組織の関係だけど、分かるでしょ？ 力を欲するは何かに振るうため、『悪魔教団侵略雑音』は破壊活動をするため、そして『絶対正義組織』の『執行人』^{わたしたち}はそれを止めるため、力の使い方が違うの。正義の味方と悪の組織が戦うのと一緒にね」

俺は考えていた。自分のような一般人が知らない世界では、こんなにも人間がそれぞれの意志で命懸けの戦いをしている。人を殺すため、人を生かすため、人を傷つけるため、人を護るため、

では、自分は？

全く知らない瑠璃華や海老村ならまだしも、その世界に触れただけでなく一度自分を原因にその戦いが行われた俺は？

誰かがやってくれるとか、自分は平和な世界にいて当然だとか、自分は何もできないとか、そんな言い訳を並べて、自分はその世界と無関係と決めつけ、拳句の果てにはそれに触れたことさえもリセツトしようとする。

ただ、自分にはそれに関わって生きていける『強さ』がないから。あの少女のような、全くの他人のために命懸けで戦える『強さ』がないから。

この少女を護ると言いながら、護り切ることができなかった。だから、もう自分は何も護れない。

それで、良いのか？

自分に対処できない問題にぶち当たって、何もできないから目を逸らしただけではないか。

あの時、恐れずデパートに入っていたような、軽い正義感じゃどうもできないなら、もう『不可能』なのか。

あの時、命懸けで戦う少女の元へ戻った罪悪感だけでは、関わることはできないのか。

違う。

力がなくとも、役に立たなくても俺は少女を護りたい。その思いだけは貫き通したい。

だが、それをするにはどうすればいいのか、それが分からない。

「で、あんたのことだけど……、」

「ん？ あ、名前でもいいよ。皆そう言うし」

「慣れないからいい」

スッパリと言われた。この少女との関係がここまでだったことに、ちよつと俺はショックを受ける。だが、ここでヘコたれてはいけな

い。

「う……、まあ、俺はルナって呼ぶけど……、いい？」

「……、うん」

それよりも、とルナが話題を戻す。

「あのナイフを背中を受けたでしょ？ 正直に言うけど、あれは確実に致命傷だった。なのにあんたは死なずに、さらに半日で体が動かせる程度まで治した。あいつの言う通りなら『癒えることのない傷』を」

「……、ドウイウコト？」

「あんたが神道とリンクし始めてるって事、多分魔術の付加効果を打ち消すようなモノだと思うけど」

「へー！ 俺すごいじゃん！ あ、確かに俺さ、昔からケガの治りが早いんだよね」

その言葉にルナの眉がピクリ、と動く。

（…… ということ？ ただ回復能力が早いだけじゃ、あの傷は治らないはずだけど……、まさか……、）

「…… でした？」

ルナが険しい顔をしているのを見て、俺は思わず喋りかけた。

「……、いや、なんでも。あ、もう一つ話すことがあったわね。あんたのお父さんについて」ルナは一度言葉を切って「私も詳しいことまでは知らされていないんだけど、あんたのお父さんの研究は、未完成ながら『人を絶対の存在にする研究』と呼ばれてるらしくて、フリーメーソンの方で研究されてたの。その技術を軍事利用するため、『悪魔教団侵略雑音』^{ノイズ}を中心に様々な組織から拉致されたんだけど、私たち『執行人』^{ハントメーソン}が拷問にかける暇もないほどの短時間で助け出してきたの」

「あー……、」

俺は思い出す。竜串ルナ、ホネット・アグゼローク、この二人の『執行人』の強さを。

あの圧倒的な實力は、元々持ち合わせていたものではないだろう。

きつと、自分のような平和ボケした一般人には想像できないような、そんな過去があつてこそその強さなのかもしれない。

確かに、そんな人達が集まった部隊なら、敵の組織が何をしてこようと笑顔で対応できそうである。

「でも今回は違う。いつもの『ノイズ』なら、一日ほど現地の小アジトに置いてくんだけど、今回は拉致してすぐに本部に運んだ。小アジトなら潰しても助け出せるけど、本部に移されたらおおびらに動けないから、様子を伺うしかない。しかも、世界各地の『執行人』達に刺客を送ることで足止めをしてきている。今は、相手の出方を見るしかないの」

「はあ……、そつか。でも、親父が殺されることはないんだろ？」

うん、とルナが頷く。

「『人を絶対の存在にする研究』は、あんたのお父さんだけが研究者で、その理屈はその人だけしか理解できないらしいの。だから、その研究で何を使うか分からない。その技術欲しさなら、その体を五体不満足にすることもできないよ」

だから時間はあるの、とルナは付け加える。

俺は天窓から雲の多い空を見る。今も、自分の父親は敵しかいないような場所で生きているのか。それなのに、自分はこう平和にのうのうとしていて良いのだろうか。ルナは焦る必要はない、と言っていたが何かドクドクとした違和感が止まらない。

心配、とは違うこの不安な感覚。

「戦争を起こす、……か。大胆なことを言うな、お前は」

工場の地下の暗闇の中、男は言う。デッドバーは答える。

「あア、『絶対正義組織』^{フリーメーソン} なんか甘エ組織に平和なんて作れっこね

え。『悪魔教団侵略雑音』と『絶対正義組織』の全面戦争だ。俺らが平和を作る」

男はデッドバーをジロリ、と見る。そして険しい口調で言った。
「全面戦争、ということはそれなりの犠牲が出……」

「カリカリすんなよ、俺としても犠牲を出すことを好んでいる訳じやねエ」

だから、と付け加える。

「あの実験が、必要なんだよな」

その言葉に、男は歯噛みする。できるだけ、デッドバーには分からないように、とても小さく。

そして話を進める。

「彼の意味はどうなんだ」

「協力する、とよ。そのための犠牲も承諾してな。まア、全世界を巻き込んだ戦争で出る犠牲に比べりゃ、たかがそれだけ。つーハナシだろ」

男はまた歯噛みする。そして口を開きかけたが、その前にデッドバーの声が耳に入る。

「んで、お前は腹ア括ったのかよ」

「……、平和の犠牲が、それだけで済むなら」

『平和の犠牲』、と聞けば、それはいけない、と思う人が大半だろう。だが、『犠牲』なしで達成できるほど、『平和』とは簡単なものではない。例えるなら、感染症のワクチン作成のようなものだ。今までに大量の血が流れ、命が失われた代償として、そのウィルスを根絶することができる。貧富や差別、暴力などの『混乱』を『戦争』を通して『犠牲』を糧に初めて、『平和』を作ることができる。彼らにできることはその『代償』を最低限に抑えることだけだ。

今度は男が先に口を開いた。

「ニューヨークから日本まで、どれくらいかかる？」

「ああああ、車でアメリカ横断して、船で太平洋横断すんだから、早くても半日はかかんじゃねえの？　あと、俺らのことを探るために、アメリカに来てる『ハントメーソン執行人』がいるらしいからなア、そっちも片付けねーと」

「……、どれくらいかかる？」

ハッ、とデッドバーは鼻で笑う。

「出発の準備しとけ。ああああ、十分もかかんねエよ」

その言葉を残して、デッドバーはそこから消えた。しばらくして、男が呟く。

「……、戦争が、始まろうとしている」

7

「……どうしようか？」

「放つとけがいい」

「イヤ、それはいかんでしょう」

ぞろぞろと人が流れていく通路を見て、庵はけっこう重いタメ息を漏らした。

ついさっきまで、瑠璃華のウィンドウショッピングを終え、「もうすぐ昼だから、どこかでメシ食おう」という事でそこらをウロウロしていた庵達御一行だったのだが、

「……この場合、どっちが迷子なんだろうか」

庵が少し投げやりに呟くと、さあ、とルナが返事を返してきた。庵がまた、タメ息をつく。

瑠璃華がいない、そう気づいたのはあの店にけっこう離れたところにあるエレベーターに乗った時だ。その後、来た道をたどりながら探していたのだが、人が多すぎて全然見つからず、店の前まで戻ってきてしまった。という話だ。

もう一度探そう、と思った庵だが、この川の流れのように絶えず

溢れている人の群れを前に、思わずまたタメ息がこぼれる。

「何でこんな人多いんだよ」

「ゴールデンウィークだし」

「はあ〜、……あつ！ そうだケータイ！！」

その手があった！ と俺はなかなか使い込んだケータイをポケットから取り出し、画面を覗く。

「って圏外かいっ！！」

がはっ、と崩れ落ちる俺。それを見て、ルナは少々哀れみを込めて、優しい口調で言った。

「ここに人が多すぎるんじゃない？ 屋内って事もあるけど。もうすぐお昼だし、少しは人が減るだろうから、その時に連絡を入れて合流した方がいいと思う。今は、ここを動かない必要がある」

「そっか……、じゃあここで時間潰すかー、ってここ主に女性服しか売ってないからな」

「それじゃ、私は私でその辺にいるから」

「はいはい」

軽くてをぶらぶらさせて、ルナを見送った俺は周りを見渡す。他にいける店があるのかを探してみたが、ここらはスーツ屋ぐらいしか男性服を売っている店はない。少し行けばメンズもあるのだが、

ここで更にルナとはぐれてしまつと本末転倒だ、と思ったのか諦めた。

「……、は」

軽くタメ息。基本的に俺はヒマなのは並以上に嫌いな人なので、ここで何かしておきたい、というのが彼の望みだ。

「……、ん……、ん……。う……、……、う……、う……う……う……！」

店の中でなんか同じ所をぐるぐる回り続ける俺。このままでは黒魔術の準備とか始めてしまいそうな勢いでヒマだ。

そんなかなで店の奥まで徘徊しきつた俺は、退屈のあまり壁にもたれた。

(……、そっぴゃルナは何してんだろ)

向かつて行つた方向的には店の外なのだが、あつちもそう遠くへは行っていない可能性も高い。案外近くにいるかもしれない、と俺は起き上がって歩き出した。

もうちよいで昼なのに未だに人は多いし、あの身長だから見つかりにくいだろうと思つたが、けっこう早く見つかった。というか、その綺麗な金髪が目立ちすぎた。

「あ……、」

さっきの店から少し行つたところ、そこにあるアクセサリーショップ。カウンターの手前のコーナーの、ネックレスを中心に置いて

あるその前に、ただじつと立っていた。

よく見ると手に一つ、ネックレスを持っている。お金が足りないのかないのか、もじもじと手を動かして、こちらには気づいていない。

「それ、欲しいのか？」

「はきやあつ!？」

まさか近くにいると思わなかったのか、イメージの割にずっと女の子らしい悲鳴を上げてルナはこっちを向く。

「べつ、べべ別に！ 見てただけ、だ、し！」

ルナは片手をパタパタと振りながら、もう片方の手でネックレスを元の場所に戻す。

「いやいや、欲しいんでしょ？」

凶星なのか、「うつ」とルナは言葉に詰まっている。それを見て俺はそうなのね、となだめる。

「金、足りねーの？」

「ホネットからまだ今月のおこづ……もとい給料をもらってないから……、」

俺はちらりとルナの戻したネックレスを見る。細めのチェーンの間に羽根と月のアクセントがついたもので、値段的には俺的に少々

痛い程度のものだった。だが、よく見ると『これと一緒にのコーナーのやつを二つ一緒に買つとお得』割引つきだった。

「なあルナ」

「な、何？」

「これさ、二つペアで買ったほうが安いからさ、俺のも選んでくれない？ そしたら買ってやるから」

「え？ い、いいよ！ 迷惑だし、それに、こんなもの付けてたら戦闘の邪魔になるし……」

「迷惑じゃねーよ。大体、俺はお前に何度も助けられたじゃん。だからそのお礼はしたいし、似合うと思うよ？ ソレ」

俺はあえてここで『戦い』のことに触れなかった。こんな、人の事を大切に思える優しい少女に、血生臭い殺し合いなど二度として欲しくない。というのが一番の理由だ。

「え……、似、合う、かな……？」

当の本人はそんな俺の考えに気づかず、他の言葉に反応して、口を手を当てて少し顔を赤らめている。

「自身持てって。じゃ、俺はどれにしよう？ これとか？」

「んっ、……コレ」

ルナが指差したのはペンダントで、片方だけ角と翼の生えたドク

口がついている。不気味に怖い。

「……、選んだコンセプトは？」

「殺しても死ななさそう」

「あつ、そう……、」

8

カウンターにはルナもついてきた。本人は気にしていないのだが、俺は三人のとき以上に恥ずかしかった。何処からどう見てもカップルにしか見えないからだ。今は店員さんのニコニコスマイルさえも直視できない。

「一緒にお包みして宜しいでしょうか？」

「あ、はい、一緒にいいです」

「ふふっ、ではそうしますねー、どうぞ」

「ど、どうも」

俺は丁寧に袋を取った後、小走りでその場を離れた。ルナは「？」と言った顔で彼を追いかけていく。その様子を、カウンターのお姉さんはニコニコと見ていた。

「……、どうしたの？」

「ん、んーん！ なんでもっ！ あ、そうだ。ホラ」

俺はゴソゴソと袋の中をあさり、ネックレスを取り出してルナに渡す。

「あ、本当にありがとう。え、と、ここでつけていいかな？」

「どーぞどーぞ、じゃ、俺もつけるか」

俺は自分のペンダントを取り出す。改めて見ると、案外悪くないかもしれない。

と、ふと見るとルナがつけられないで悪戦苦闘していた。多分、連結部分が小さくて、上手く引つかからないのだろう。

「……、手伝おうか？」

「い、いい！ これぐらいできるっ！」

俺はそのペンダントを軽々と首にかけると、「うぬぬ……」とうなり声を上げながらネックレスの連結部分と格闘する少女を眺める。

とその時、俺の携帯が鳴った。画面を見ると『相川』と出ている。

『もしもーし！ 俺、生きてるー？』

「ここ戦場だよ」

『はあ、やっと繋がった……、つうか今どこにいる？ あたしはー

階のファーストフード街にいらんだけど』

「うわっ、遠いな。じゃあそっちに行くけど、時間かかるかもしれないから」

『うん、分かった。……で、あの子は一緒にいるの?』

なんかすごく険しい口調になったので、瑠璃華に少々恐怖を感じた俺は、いまだに連結部分と激闘死闘を繰り広げる不器用少女を見て、

「うん、まあ、一緒だけど……、何か?」

『べ、別に! じゃあ、さっさと来てよね! じゃ!』

瑠璃華はそれだけ言うつと電話を切ってしまった。何が気に障ったんだろう、と思う俺の耳に、唐突に歓喜の声が入る。

「で、できた!」

そこには、連結部分との熱戦を終え、ネックレスをかけたその胸をやけに誇らしげに強調する金髪の少女がいた。

それ以上に、笑顔だ。よく考えると、俺はこの少女の『嬉しさ』からの笑顔を見たことはなかった。それ故に、見とれていた。

(……、なんだ、)

俺は思った。あの日、デッドバー・リングは笑っていた。まるで、子どもがゲームで買ったときのような笑顔で。

正直なところ、俺はルナやホネットもそうなのではないか、と思
っていた。『戦う仕事（殺し屋）』、それを選んだ人は全て、『戦
う』こと好んでやっている人間なのではないか、と。

だが、違う。いや、違った。

（笑ってる方が、格段似合ってたんじゃない）

要は、ルナもホネットも笑顔が好き、ということ。二人とも好き
で戦っている訳ではなく、ただ、代わりがいなかったからその立場
についただけ。その場所に自分がいないとたくさんの人の笑顔が奪
われるから、命が奪われるから、その位置についただけ。本当はず
っと平和な世界が似合う人間なのだ。

と、そんなことを考える俺に、ルナが「ねえ」と呼びかけた。今
度は少し顔を赤くして、もじもじと胸に手を当てている。

「に、似合う……かな……？」

「ん？ 結構いいと思うよ？」

「そそ、そうかな……っ」

さらに顔を赤くするルナを見て「？」な俺は瑠璃華の事を思い出
す。

「あ、そうそう。さっき瑠璃華から電話があっただけだよ……、
あの、聞いてます？」

「あ、え？ あっ！ き、聞いてるから！！」

「イヤ……、そうならいいけど。一階のハンバーガー屋にいらしいから、そこに俺たちが行くことになったんだけど……、もう行く？」

「も、もう！？」

なんか顔を引きつらせるルナに、俺は少々困る。

「え、あの、まだいたいんならいいんだけど。別に」

その言葉に目を輝かせたルナだが、すぐにいつもの冷静な顔に戻り、「い、いい。行こう」と言ってさっさと行ってしまった。恐らく、ワガママを通そうとしていた自分を格好悪いと思ったのだろう。

早足で進む少女の背中に、俺が声をかける。

「おーい、本当にいいのかー？」

返事は来なかった。

俺はしょうがなくルナについていく。

俺は気づかなかった。

彼女が、その胸にかかった金属の首飾りを、温かくなるまで握り締めていたことを。

金髪の少女は、とても、『幸せ』だった。

間話

間話

大都市の近場とはいえ、工場の並ぶこの辺りに、用のある一般人などいないだろう。

フレッド・シャインはアメリカの防波堤にいた。

その名前からして、彼がアメリカにいるのはおかしくないと思える。が、彼はイギリス出身で、日本国籍だ。二十代前半の頃に仕事の都合で日本に来てから、もう二年は経つ。お陰で日本語も人並みに話せるようになった。強いて言えば、彼にとつてアメリカなど「海外旅行のプランを立てた時に候補に入る国」程度のものでしかない。

なら何故、そんな彼がアメリカにいるのか。それもまた仕事である。

フレッドは神父だ。日本に協会を持ち、独身ではあるが、居候と居候シスターがいるせいで賑やかな生活をおくっている。だが、それだけなら彼がアメリカに来る事はなかった。

彼はもうひとつ職業を持っている。今日、こんにちアメリカへ足を運んだ理由もそれだ。

『ハントメーソン
執行人』

俗に言う『殺し屋』、平和の為であるとはいえ、殺人を犯していることに変わりはない。

今回の仕事の内容は『テロの阻止』^{ちようそ}。『悪魔教団侵略雑音』^{ノイズ}が裏に大きな計画を企てている可能性があるとして、『絶対正義組織』^{フリーメイソン}より彼が派遣された。

可能なら潰せ、との事だ。

だが、フレッドはその防波堤に身を投げ出すように転がっていた。

「がっ……、ゴボッ！ ……し、失敗……しま、し……たね……、」

喉から血が溢れ、その口から流れていく。

まさか、こちらの存在が知られていたとは予想外だった。ノイズのメンバー、と思われる者達がこの港へ向かい、中型の船に乗って行くところを観察していたフレッドだったのだが、

（油断していたとはいえ、後ろを取られるとは……、私もまだまだですね）

何が起こったかは分からない、ただ、腹に風穴が開いていた。それだけのことだった。

（殺されなかっただけ、良かったかもしれませんが）と口の中で呟く（ですが、助けも来ないでしょう……。元々、この『執行人』^{ハントメーソン}が『ノイズ』から襲撃を受けて動けないから、私が派遣されたんですし……）

一般人がここに来る、という可能性も考えたが、諦めた。こんな排水だらけの海はさすがに何の用もないだろう。

（奴ら、「日本」とか「戦争の火種」とか言っていました……、大丈夫ですかね……。日本、には一応ホネットとルナや神和^{かなぎ}たちがいますが、……手を出されては困ります。……それに）

『無重鎧の羽根飾り（ロセンスデコレ）』、何故それを彼らが呟いていたのか。

フレッドの意識は、そこで落ちた。

第四章 望みと激突のページ 1

第四章

1

太陽も沈みきって、静かな街灯が照らす道を、庵とルナは歩いていった。

あの後、昼食をとり、ゲーセンで時間を潰したあとに、ルナの買出しを済ませ（庵が代金を払った）、帰路についた。瑠璃華とは、さつき分かれたばかりだ。

庵の両手には、中身のびっしり詰まったビニール袋が提がっている。自分が持つ、とルナは言ったが、それは流石に男としてどうかと思うので、自分から進んで持ったのだ。

「……、」

にしても辛い。重い荷物を抱えていることもそうだが、何よりさつきから会話が無い。

ルナを見る限り、もう機嫌は悪くないようだが、話そうとする気はなさそうだ。

（家まではまだあるし……、何か話すか）

だが、こういうときに限って頭に何も浮かばないのが人間である。

「~~~~つ。……えとっ！ あっ、あのさ」

「ん？ 何かな」

「えーと、何であの時帰ろうとしたんだ？」

ああ、とルナは返答する。

実は、ゲーセンの後、ボーリングに行くつもりだった。だが、ルナが早く帰ろうと言ってきたので、帰ることにしたのだ。

「ホネットがいるしね」

「ホネット？」

「うん。あの子、心配性だから」

はあ、と俺は首を傾げる。戦う時はクールで、日常は裸エプロンで、さらに心配性と。一体どれだけ個性的な殺し屋だろう。

「あれが心配性ねえ……」

「ホネットを『あれ』呼ばわりするなっ！」

けっこう本気で怒られた。それほどホネットという存在はルナにとって大切なのだろうか。

「……ご、ごめん」

「えっ！ あっ！ ゴメン！ 私こそなんか怒鳴っちゃって……」
しょんぼりとうな垂れる俺を、ルナは必死で励ます。

「……、そういえばさ、ルナとホネットってどういう関係？」

「兄妹」

兄妹だった。

ルナがすごい単語を口にしたので、俺は思わず嘖き出す。

「んな訳ねえだろ！ 名字とか、瞳と肌の色とかも違うじゃん、お前ら！」

「その言葉にはイラっとくる。名字とか、瞳と肌の色も同じじゃないと家族には、兄妹にはなれないの？」

「う……、ゴメン。……っーことは、えっと、親の再婚とか？」

「違う。私もホネットも親はいない。私が、ホネットに拾われたの」
俺は眉をひそめた。

「拾、われた……？」

その間に、ルナは平坦な声で「うん」と答える。

「私が8歳か9歳ぐらいの頃かな、フランスの協会の前に捨てられてた私を、ホネットが拾ってくれたの」

「……、つつか、今何歳？」

「16」

同じ年だった。

ルナがものすごい返答をしてきたので、俺は思わず嘖き出す。

「んな訳ねえだろ！ 第一印象、中学生以下のお子様だろ！ 身長とか、特にム……」

俺がその単語を言い終わる前に、ルナのレイピアが彼の髪をかする。

「『ム』？ その後には何が続くのかな？」

「イヤッ！ なんでもつ、ないですッ！」

それだけで人を殺められそうな殺気を笑顔で放つにルナに、俺は全身全霊で謝る。本当に、その剣はどこから出てくるんだか、と内思いながら。

そ、とルナは不機嫌そうな顔で剣を降ろす。

「……、あ！ そういえばさ、あの後」

「……？」ルナは少し考えて「ああ、デパートの？」

俺はうなずく。

「あれだけの事があつたのにさ、警察や野次馬が全く来てなかったし、そこにいたはずの人もいなかった。それに……」

「誰に話しても、それに無関心そうだった、と？」

先を読まれて少し動揺しながらも、俺は「そうそう」と相槌を打つ。

「警察も野次馬、救急車……、来たよ。でも、一般人に『神術』、

『魔術』、特に害のある『魔術』を見られるわけには行かないから、フリーメーソン絶対正義組織』側で隠蔽工作するの」

ルナは一息置いて、

「やり方はいろいろあるんだけど、今回は私の『無重鎧の羽飾り』ロセンスデコレ

で彼らの『事態の重要性』を軽くして、その物事自体に無関心にさせた。だから、その人たちにとってあの事件は『ガムを踏んだ』程度のことになるの」

そのやり方に、俺は少し恐怖を覚える。

「んな事もきんのかよ、あの羽根……」

「『重量』のあるものなら大体軽くできるよ。人の命とかは軽くないけど」

いや、できなくていいと俺は内心ゾツとする。

対してルナは、得意分野のことを説明してて楽しいらしく、目を輝かせながら続ける。

「でね、昔……って今もいるんだけど、『ヴァルキュリア』っていう主神の天使がいてね。あ、『ワルキューレ』とも言っただけけどねっ。

勇者の魂を集める使命があって、世界を飛び回ってたんだけど、なんとこの天使、翼がなかったの！　どうやって海を越えたんだと思う？

それはね、鎧についてる装飾用の羽根だったの！」

びしっ！　と指を突き立てるルナ。

「……あー」

正直、この部類の話はついていけないので、俺はとっと話を終わらせようとする。

「うんうん。で、その羽根がお前のアレだと。分かった分かったすごいなー」

「……」

すねてしまった。

しまったー、と思った俺は、不本意ながら話を合わせようとする。「あ、じゃあさ！　俺のケガの治りの早さってのは！？」

むー、と視線だけを俺の方へ向けるルナ。その瞳が、「どうせ興味ないんでしょ？」と言っている。

「うっつ！　いや、でも！　こう、やっぱり自分の体のことだし、気になるじゃん！」

辞書で「営業スマイル」を引くと図解でついてきそうな笑みを浮かべる俺を見て、ルナはため息をこぼす。

「……ま、いいか。私も気になるし」

ルナは星空を眺めて、「あのね、この星にはね、いや、宇宙も含めるんだけど、たくさんの神様や天使、悪魔が存在していたの。まだ生きてるものもいるけどね。とにかく、彼らはもう死んでいて、

残っているのは魂だけなんだよ。ほとんど全ての『神術』や『魔術』のリンク先はこれなんだけど、たまに『まだ生きてる者』とリンクする人間がいるのよ」

私とかね、と付け加える。

「こういうタイプは珍しいんだけど、でも、さらに珍しいタイプがあるの。」

神道では『新星天児^{ニユワース}』って言われるんだけど、その名の通り『新しく生まれた神や天使、悪魔』とリンクしたものね」

「それが……俺？」

「かもしれない、ね。まだ覚醒してもいないから、確信はできないけど」

「ふーん。じゃ、ホネットは？ ……あ」

俺はしまったと思った。ここで話を展開してはならない。だが、時既に遅し。

ルナの瞳は輝きだした。

「ホネット？ ホネットね。あのねホネットもまた特別でね話せば長くなるけど目的地までまだあるしゆっくり話していくね」

もう既に早口である。

今回は自分に責任がある、と諦めた俺は、しかし笑っていた。

（まあ、こうやって話していても楽しいかもしれないな。いつまでルナと一緒にいられるかわからないわけだし）

いつか別れが来る。なら、精一杯今を楽しむべきだ。

「おう。それで？」

今を楽しむ、初めて感じたその感情に驚きを感じながらも、俺はそれを受け入れていた。

第四章 望みと激突のページ 2

2

「……………ッ!!」

俺とルナはほぼ同時に、目を見開いた。

目に見えるもの、耳に入るもの、痛み、その全てに何の変化もない。

だが、何かが体を突き抜けた。

俺にはその正体が全く分からない。答えは、ルナが知っていた。

「これは…………、『魔力』ッ!」

「…………! これが…………!」

「…………? 分かるの?」

ルナが予想よりの外れな質問をしてきたので、俺は少し戸惑った。

「え、ああ、うん。なんとなく…………。」

つつか、『魔力』って…………!」

ルナは少しの間複雑そうな表情を浮かべていたが、今はそれどころではないか、と頭を切り替え、

「『悪魔教団侵略雑音』が近くにいます。それも、こちらで分かるくらいに能力を放出しながら。目的は、多分あなただと思う」

俺の脳裏をよぎるのは、デッドバーの顔。

「また、あいつが…………」

「帰ってて」ルナはレイピアを片手に持つと、「私が足止めをする。あなたは、怪我しないように帰ってて」

「…………でも」

もう一つ、脳裏に浮かぶ映像は、ボロボロの少女。自分を逃がすために、護るために戦ってくれた一人の女の子。

ルナはムッ、とした表情を作り、

「でも、じゃない。狙いがあなたである以上、あなたを敵の元に連

れて行く必要はない」

それは突き放すような言葉だったが、裏返せば、今度は護りきれぬ自身がないという事か。つまり、自分を囿にする気さえあるのか。俺は心で舌打つ。逆に苛立ってくる。なぜ、この少女はここまで他人を護ろうとするのか。

「お願い。帰って。そして、ホネットを呼んで。あなたは役に立たない、足手まといだと言っててるわけじゃないの。あなたにはあなたのやるべき役目がある」

ルナの言いたいことは分かる。実際、デッドバーとやり合えたのはホネットだけだ。戦闘なんてまるでできない俺が出しゃばるよりも、ホネットと一緒に戦ってくれた方が、ルナにとってはずっと頼りになるのだろう。

ルナの安全を考えるなら、客観的に考えるなら、その方法が一番いい。

心の中だけでも否定したいが、それさえもできない事実。ただ「無力」という言葉だけが、俺の頭を駆け巡る。

「……分かった。ホネットを呼んでくる」

ルナは苦笑いを浮かべると、「ありがとう」と言っただけで去った。

残った俺は、唇をかみ締めながらも、帰路を進んだ。

第四章 望みと激突のページ 3

3

ルナは通りを目にも留まらない速さで走り抜けてゆく。『無重鎧の羽飾り』の効果で摩擦、空気の抵抗、自分の体重などを調整して、常人ではありえないスピードを生み出しているのだ。その速さは、時速50キロを超えている。

その走る先には海があるはずだ。

(……、船？ 太平洋側から船が来るなんてありえないけど……) だが、可能性はある。電気会社ノイズの本社はアメリカだ。なら、『悪魔教団侵略雑音』の本部もその付近にあってもおかしくはない。しかも、船だ。航空機も使わず、船で来たという事には、それなりの訳があるだろう。

(確実にあつちにはレーダーをすり抜ける図式を持っている。なら、次に考えるのは人目……。つまり、相手は潜水式の船を使って来ている……?)

一つだけ、疑問が浮かぶ。なら、なぜ魔力を放ってきているのか。誘われている、としか考えられない。こちらが、警察や軍隊に連絡をいれず、『執行人』だけでやって来る、という絶対的な自信があるのだろうか。

ルナは確かにそうはしなかった。彼女の座右の銘は『誰も死なないこと』だ。他の『執行人』からは笑われるようなモットーだが、それが彼女の全てだ。誰も死ななくていい、死ぬのは自分たちのような人間だけだ。

だから、彼女は一般人を巻き込まない。どれだけの訓練を積んでも、警察や軍隊は普通の人間だ。そんな者が、『人』を超えた力に太刀打ちできるわけがない。だから、たとえ自分一人で戦うこと

なろうとも、彼女は逃げない。自分が逃げたら、その後ろにいる、自分が護っていた人が犠牲になる。そんなの、耐えられない。

しかも、その中にあの少年が入っているなら、なおさら。

「……、」

ルナは仕事上、たくさんの人を護衛してきた。時には大富豪、時には政治家、様々な分野のトップを。彼らは皆、汚かった。汚職に手を染め、金に物を言わせ人を殺し、自分の盾など幾らでも用意する。一言で言えば、自己中心的。自分さえ安全で、裕福ならそれでいい、そういう人ばかりだった。

だが、あの少年はなんだ。

大した関わりもなく、これきりの縁だというのに、あの少年は自分の事をかえりみず、護衛する側のルナを護ろうとする。そんなこととしても何の得もないのに、自分に気を使ってくれる。

あんな人、初めてだった。

ホネットに似ているかもしれないが、また違う。

ホネットはたまに、自分と接する時に影を見せる。だが、あの少年は純粹に自分と接してくれる。笑ってくれる。

ルナは、その笑顔を護りたいと思った。仕事で護るのは違う、なにか他の感情がそう思わせる。

この感情は何なのだろう。

今までに感じたことのない、とても暖かくて、もどかしくて、でもどこか嬉しい、そんな思い。

あの少年の事を考えると、不思議と笑みがこぼれてきてしまう。もっと、彼と話したい。今度こそ、きちんと名前で呼んであげたい。

もう、これきりの縁、なんて引け目を感じたくない。

「だから……」

まずは、目先の問題を終わらせないといけない。これを終わらせ

て、笑顔で帰りたい。

ルナはその華奢な首にかかる金属に手を触れる。それだけで、強くなれる気がして。

「……、俺……」

眩き、彼女は敵の元へと走り抜ける

第四章 望みと激突のページ 4

4

「……ッ！」

俺は驚いた。

ルナと分かれて数分経ったところで、家に着いたのだが、そこで驚くべき光景を目の前にした。

「なんだ、これ……」

家の周りを何か、透明な半球のようなものが覆っている。雰囲気としては、漫画でおなじみの「結界」のそれに似ている。

何が起こっているのかわからず、ただ立ち尽くす俺に、不意に声がかかった。

「……あなたは誰ですか？」

俺は振り向く。そこには、巫女が着ている服を身にまとった、同年代ぐらいの少女がいた。

「え……、だ、誰って」

俺が戸惑っていると、少女は不思議そうに彼をじーっ、と見る。すると、何かひらめいたように、

「ああ、あなたが獄魔^{ひとやまいお}俺さんですか」

あまりにもいきなり本名を当てられたので、俺は少し彼女に敵意を抱く。

（……まさか、敵？）

警戒態勢に入った俺を見て少女は「大丈夫ですよ」と薄く笑う。

「敵ではありません。私の名前は「神和巫東^{かななぎみと}」、「執行人^{ハントメーション}」です。上位支部からの命令で、ホネットさんと竜串さんの援護をしにきました」

「援護……？」

「ええ。ホネツトさんから上位支部へ救援要請が出たので、現地に一番近い場所にいた私が派遣されたわけです」

「ホネツト……。そうだホネツト！　なあ、ホネツトはいないのか！？　ルナから呼んで来いって言われたんだ！」

俺が訊くと、巫東は怪訝そうな顔をして、

「ホネツトさん、ですか？　……おかしいですね。ここにはいませんでしたし、なにより竜串さんと一緒にいる、と上位支部には言っていたので」

「……！？　今なん、て……？」

巫東は「？」とした顔を浮かべながら、

「だから、ホネツトさんが竜串さんと一緒に敵と戦っているから、あなたを護衛するために私が呼ばれたんです。この結界も、そのためなのですけど」

俺の全身から血の気が引いていく。

ホネツトがルナと一緒に戦っている？　そんなはずはない。俺は今日一日中ルナと一緒にいたし、ホネツトは朝から仕事で出ていた。一緒にいるはずがない。そもそも、戦闘もしていない。

ホネツトが嘘をついた？　としか考えられない。なら、何のために？　そこまでしなければ神和巫東は来なかったから？　俺の護衛を固めたかったから？　ルナの負担を減らしたかったから？

俺は巫東が嘘をついている、という可能性も考えたが、違うと思った。明らかに敵意が感じられない。根本的理由はないが、敵だとは思えなかった。

「なんで……？」

「？　何を悩んでいるんですか？　魔力の放たれている、あの方角の先で、二人は戦っているのではないですか？」

巫東は、海のある方向を指差す。確かに、この方角にルナは走っていた。

分からない。ホネツトの考えていることが。何のつもりだ。何が目的なんだ。

俺は少し考えた後、

「巫東、さん。お願いがある……あります」

巫東は困った顔で俺を見ると、「なんですか？」と返した。

「俺を、その場所へ連れて行ってくれませんか？」

「……？何を言っているんですか？」

「すぐく場違いなことなんだろうってのは分かってます。でも、何が起こっているのか、確かめないと……。もしかしたら、ルナは……」

その先は言えなかった。

「意味が分かりません。どう理由があつたとしても、そんな危険な場所に行か」

「それでも！行かなきゃならないんです！あいつは俺を守るために一人で戦ってくれているのに、それを遠くで見ているだけなんてできないんだ……！」

「……！」

俺に圧倒されて、巫東は少し身を縮める。

彼女は顎に手を当てて、しばらく考え込んだあと、笑ってため息をついた。

「あなたみたいな人、嫌いじゃないですよ。竜串さんはきつと迷惑するでしょうが、彼女もきつと、心の底では嬉しいはずですよ」

え！？と俺は顔を赤くする。

「そ、そそそんな……。……ん？て言うことは？」

巫東はクスクスを笑い、

「さあ、彼女を助けに行きましょう」

と、俺の額にお札を貼り付けた。

「では、行つてらっしゃい。わたしも後から参ります」

え、と俺が言う隙もなく、光と音ともに俺の体はその場から消えた。

庵たちが住むこの町は、港町なだけあつて漁港が栄えている。

夜の沿岸は、卸売市場の建物があちこちに並び、その青白く月光に映える屋根がどこか異質な雰囲気を漂わせる。長く続く防波堤は、木の枝のように海に手を伸ばして突き出していて、白い屋根と合わせると、それはさながら巨大な烏賊の触手のように見える。

その触手の先には黒光りする潜水艇が一隻、海の上に顔を出していた。だが、海に潜むそのシルエットを見る限りではとても「潜水艇」とは言えない。「潜水艦」、主に軍事目的に使用される銃器を積み、並の火器ではビクともしないように見える丸い外見をもつそれは、ただじっと、獲物の動きを待つ肉食獣のように息を潜めていた。

だが、それは「普通の人間」から見ての沈黙だ。その船がただ一つ押し殺していないものは、ある種の人間が見れば分かる。

それを含めても、ルナは絶望していた。

彼女がいるのは沿岸にある小さな工場の上だ。このあたりでは一番見晴らしのよさそうな場所だったので、ここで敵の程度を確認しようとしていたのだが、

「ありえない……。軍事用潜水艦……？ しかも推定するに相当な銃器を装備してる……」

いろいろな点から、ルナはあの潜水艦を分析していた。戦力、機動性、中の人間の数、それらを考えても、やはり彼女の頭には絶望の二文字しかない。

まず、あれは米軍式だ。世界一の軍事力を持つ軍が持っている潜水艦なんて、一隻だけで小さな島ぐらいいは簡単に吹き飛ばせる。暴れだして自衛隊が到着するまでには、この町は焦土と化しているだ

ろう。しかも中にいるのであろう人間たち。五、六人に満たないぐ
らいの船員でこんなに大きい船を動かしていられるのは「魔術」を
使っているからだろう。放っている魔力の大きさも考えて、決して
雑魚ではないだろう。

ルナは片手に握り締めたレイピアを眺める。

結論から言えば、無理だ。こんな軽装備で勝てるほど「魔術」は
甘くない。昔から知っていたことだが、前回のデッドバーとの戦い
でそれを思い知らされた。

気づけば、冷や汗が頬を伝っていた。ルナはそれを空いた手で拭
き取ると、自分の周りに「無重鎧の羽飾り」ロゼンステコレを出現させた。月光に
映える純白の羽根は、彼女の周りをひらひらと舞う。デッドバーと
の戦闘では出現さえもままならなかった羽根たちは、いつも通りの
数と位置で、いつも通りの効果を発揮　一般人をこのあたりに
寄せ付けなくしている。

ルナは不思議でたまらなかった。デッドバーの言い様では、もう
二度と出現しない筈なのに、それができている。何か、あの能力に
は「穴」があるのだろうか。もしそうだとしたら、あの図式を潜り
抜けることができるとするならば、デッドバーだけには勝てるかも
しれない。

だが、あくまでそれは「デッドバーだけ」の話だ。彼は今まで戦
ってきた他の「悪魔教団侵略雑音」の者と比べれば飛び抜けて強い。
しかし今回、あの潜水艦の乗組員は全てデッドバー並の「魔力」を
放っている。それだけで強いかどうかは確信を持てないが、察する
には相当なものだとルナは思っている。

つまり、デッドバーを何とか倒せたとしても、残りの戦闘員を倒
せる自信はルナにはない。というか不可能であって、無謀な行為だ。
ルナにはもう一つ疑問があった。まず、彼らの目的は「獄魔ひこやま 庵いあ」
の抹殺ではないのか？　この町には現在、自分とホネットしかないな
い。ホネットは十分にあつちから見ては強敵なのだが、逆に言えば
それだけだ。ホネットは強いが、デッドバーぐらいの戦闘員が二人

でかかれば簡単に負けてしまう。それぐらいの強さしかない。

だからこそ、たかが一人の高校生を殺すぐらいで、何故ここまでの戦力を用意する必要があるのだろう？

「何か他に目的があるのでしょうか思えない……。とにかく、敵地に潜り込まない以上、詮索の余地はないんだけど……。ホネット遅い……。」
ルナが少し不機嫌に呟いたその時、

「ほおお。これはこれは、ご到着が早いことで。さすがは『絶対正義組織』、と言ったところですか？」

老人のようなくもった男の声が、ルナの耳に入った。

「ッ！」

彼女が反応するまでもなく、刹那、ルナの足元が爆発した。吹き飛ばされたが、「無重鎧の羽飾り」^{ロセンスケル}の能力でルナは音もなく地上に着地し、工場の方を見る。

その先には轟音を立てて崩れ落ちる白い工場と、その中から歩いて出てくる一つのシルエットがある。

「ほほう。これがデッドバー殿の仰っていた衝撃吸収の羽根ですか。なるほど、見惚れてしまうような美しさがありますね」

その声に敵意はなく、ただ淡々とした感想があった。

月光に照らされて姿を見せたのは、一人の老人。きつちりと整髪された肩まである銀髪、彫りの深い優しそうな顔には英国人の瞳と肌。そして痩せぎすな体躯、それを包むタキシードはそれら全てを「英国紳士」という印象に変えている。

第一印象から言えば清潔的なイメージが浮かぶが、その清純な体にまわりつく黒いものが、ルナに「敵」だと認識させる。

「あんた……。『悪魔教団侵略雑音』^{ノイズ}の……」

ルナが警戒態勢に入っただのを見て、銀髪の老人は「おお、失敬」とドレスグローブを身にまとった手を横に振りながら、

「自己紹介が遅れましたな。ええ、察しのとおり。私は『悪魔教団

『侵略雑音』のメンバー。名をフレデリック。フレデリック・バツテ
イスタと申します。以後、お見知り置きを」

フレデリックという老人は深くお辞儀をした後、さわやかな笑顔をルナに向けた。敵に対してのあまりの紳士ぶりに、ルナは思わずうっ、と後ずさりしてしまう。

「わ、私は敵に名乗る必要はないとお」

「おお、いえいえ。大丈夫です。無理をなさらずに」

えっ？ とルナはきょとんとした顔を浮かべた。

フレデリックはさわやかな笑顔を崩さずに続ける。

「あなた方の名前なんて覚えていても無駄というものでしょう？

もしかして墓碑でも探してもらいたいのですか？」

「っ！ あんた……！」

「悪いのですが、ここで時間を費やすのはいささか如何なものかと。私にも一応、仕事というものがありますので。早々に終わらせていただきますよ」

老人は虚空からサーベルと取り出すと、その切っ先をルナへと向けた。

「なるほど、偶然。私も時間ないの。あんたなんかのに手間取っている暇なんてないから、早めに終わらせてよね」

ルナもそれに応えるようにレイピアを構え直す。

月光に照らされた海辺で、静かに戦いは幕を上げた。

ぶおん、という音とともに、庵いおの体はその空間に出現した。
「つと、うわっ！」

なんとも情けない効果音と声を上げた庵は、その場に尻餅をつく。
「つつ……、もうちょい低い場所からだせねーのか……。ほぼ2メートル上から落ちたぞ……」

ズキズキと痛むお尻をさすりながら、どこに落ちたのかを確認する。

庵がいる場所は、卸売市場のせり場をバックにして月光に映える海の、その二つの間にある防波堤の上だった。

ここには何度も来たことがある。両親もいなくて、海老村とも会っていない、つまり友達は瑠璃華ぐらいしかいなかった頃の彼が、よく一人で釣りやスピアフィッシングをやっていた場所だ。

だからこそ、奇妙な点がある。人がいない。ゴールデンウィークのせいもあって、夜の漁に出る人がいないのは分かるが、昔からこの場所を知っている庵としては、この人気のなさはどうも腑に落ちない。まるで、あのデパートの事件の、デパートから出て来た時のあの異様な風景のようだ。つまり、ルナのあの羽根による能力が発動している、ということか。

つまり、この辺りにルナがいるのか、と彼女を探す庵だが、彼女を見つければ前に恐ろしいものを目にした。

「……っ。デッドバー……！」

庵の目の前に広がる海のちょうど真ん中辺り、そこに浮かぶ黒いシルエットが顔を出している部分の上に、それはいた。

距離は遠い。つまり、庵が見えている「それ」もぼやけていて、

デッドバーである、という確信はない。だが、そこから放たれている妙な違和感。それが、無意識ながらも俺に昨夜の記憶を呼び起こす。

俺はすぐに近くの建物の陰に隠れた。前述したように、距離は遠い。まだ俺が近くにいて、とはバレてはいないはずだ。

俺はデッドバーのいる方向を睨みつけながら言った。

「ちくしょう……。本当に来てやがる……。！……。ん？ 待てよ。なんであんなに余裕に構えてんだ？ ルナが向かったんだから、戦うとか、逃げるとか、なにかするだる普通」

まさか、「即行で片付けました」はないよな、と縁起でもない可能性を考えながら、俺は思考を巡らせる。

（ルナは確実にこっちの方向に向かっていった。そしてその先にはデッドバーがいた。んで、はいここで会ったが百年目！ いざ勝負！……ルナの性格から考えてそれはない。まずは様子を伺うはずだ。なら、……。ルナはまだどこかで息を潜めている……。？）

俺の思考がそこまで辿り着いた時、遠くから爆音……。というよりは建物が崩れるような音がした。

俺は驚いて、その場所を確認しようとするが、見えない。何かないかと辺りを見回して、せり場の屋根へのはしごを見つけると、それを一気に駆け上る。

屋根の上に立った俺は見晴らしの良い場所を探し、音源の方へ目を凝らす。

視界の先には、崩れる小さな工場と、そこから立ち上る白煙が空を覆っていた。

そしてもう一つ、ぼんやりと、だがハッキリと、噴煙の中から吹き飛ばされたように出てきた、一人の少女が見えた。

「ッ！ ルナ……！」

俺は叫び、彼女の元へと向かう。

第四章 望みと激突のページ 7

7

戦いは、誰が合図することもなく始められた。

「はああっ！」

ルナは一気に間合いを詰め、レイピアをフレデリックの体に突き出す。フレデリックはサイドステップでそれをかわし、サーベルでルナの剣を弾き飛ばした。

「なっ……！」

レイピアが回転しながら宙を舞う。

「ほっほ。甘いですねえ。急所を狙わないから、簡単に避けられるのですよ」

フレデリックは丸腰になったルナに、容赦なくサーベルを穿つ。だが、その突きは急に威力を落とし、ついには止まってしまった。フレデリックが確認すると、刀身に幾枚かの羽根が付いていた。

（……！ 衝撃吸収の付加ですか……！）

フレデリックは攻撃を中断し、サーベルに付いた羽根を薙ぎ払った。

「ほほう。運が良かったですねえ。能力に助けられるとは……。…むっ？」

フレデリックが再び構え直したときには、ルナはレイピアを手にして、彼に攻撃を繰り返そうとしていた。

「おっと！」

フレデリックは後ろに下がって、間合いを開く。

ルナは跳躍し、落下と共にその鋭いレイピアをフレデリックに突き刺そうとする。その高さは、常人ではありえない程のものだ。

それを目に留めておきながらも、フレデリックの表情に焦りの色は見えない。

「ほほっ！ 上から仕掛けてくるとは、なかなか能のないお方ですなあ！ こういう攻撃も、避けようがないでしょうに！」

フレデリックは笑顔を浮かべ、手にあるサーベルを落ちてくる彼女めがけて突き出した。ルナのレイピアは長い方ではあるものの、それでもサーベルのリーチには敵わない。このまま落下してしまえば、彼女の脳天を一本の鉄針が貫くことになる。

だが、ルナはフレデリックが思うような軌道を描いて落下しては来なかった。彼女の体はサーベルの切っ先をギリギリで掠め、彼女の剣がフレデリックの左肩を貫いた。

「ぐっ、あああああああああ！？」

フレデリックが苦痛に崩れようとする、ルナは刀身が折れないようにレイピアを勢いよく抜き、彼の顔面に回し蹴りを叩き付けた。

「がっ！！」

フレデリックの体は吹っ飛び、数回バウンドして地面に転がった。ルナは姿勢を戻し、レイピアに付着した血を振り払った。そして周りに漂う白い羽根を一枚手に取る。

「能がないのはそっち。空だったら移動できないのはサルでも解る。あと、何か間違えてるみたいだから言っとくけど、この羽根の能力、衝撃吸収じゃないから」

「なん……ですと？」

実際には「おもみ」を軽減できる『ロセンスデコレ無重鎧の羽飾り』の能力で自分の体にかかっている重力のバランスを乱れさせて、軌道を変えただけというトリックなのだが、そもそも『無重鎧の羽飾り』の能力が「衝撃吸収」だと思い込んでいるフレデリックにはそんなことは思いつくはしない。

フレデリックはよろよろと起き上がる。押さえてもいない左肩からは血がどくどくと溢れ出し、右目に大きな痣ができています。

「教える必要はない。たとえ教えたとしても、その体じゃ私には絶対勝てない」ルナはレイピアの切っ先をフレデリックに向ける。「降参しなさい。そうしたら、私がこれ以上あんたを傷つける必要は

なくなる」

フレデリックはしばらく彼女を見つめた後、なにか振り切れたように笑った。

「ははははっ。くつくくく……。いや、失礼。久しぶりに面白い方に出会えたもので」

ルナは不思議そうな顔を浮かべて、「何で？」と聞き返す。それを見たフレデリックは、まるで孫と遊ぶ時の祖父のような優しい笑みを浮かべて、

「決して急所は狙わず、レイピアを刺す時も、腕が使い物にならないように、上手く筋の隙間を貫く。そして締めには降参しろ。……相手のことを考えすぎですな。いつか足を掬われますぞ」

彼の言葉はどこか、強い意志が籠められているようにルナには聞こえた。

「……。いいの。それで誰かを殺さずにすむなら、いくらでも私は危険を犯すと決めたから」

フレデリックはまた笑った。嘲り、ではない。ただ純粹に可笑しくてたまらないのだ。

「ははっ、甘い。とことん甘いお嬢様でいらっしゃる。まるであなたの方の真逆をいく考え。平和ボケ、と言うのでしょうか。こういうものを」

「なっ！　へ、平和ボケなんかじゃないっ！」

ルナは顔を真っ赤にして言った。フレデリックはそんな彼女を幸せそうに眺めると、手に持っていたサーベルを、ルナの足元に投げ捨てた。

からん、と呆気無い音を立てて地面にサーベルが転がる。

「……！　なん……」

「でも、そんな考え、私は嫌いではありません。降参します。私の負けです」

「……、」

フレデリックはルナに歩み寄った。そして、彼女に手を差し出す

と、

「最後に、貴女の名前を覚えていただけないでしょうか？　こんな敵にですが」

悲しい顔を浮かべるフレデリックを見て、ルナは心のどこかでホツとした。

「私はルナ。竜串ルナ。よろしく、フレデリック」

「ほほお。私の名前を覚えていただけているとは、誠に光栄です」

「約束して。『悪魔教団侵略ノイズ雑音』から抜けると。あなたみたいな人は、ああいう所にいちゃいけない」

フレデリックはルナの目を見た。強い決意が宿った、紅い目だった。

「ええ、分かっています」

フレデリックは笑顔で言った。

「貴女のような平和ボケした人間は、即急に死ぬべきだと、ね」

「……………え？」

ルナが間の抜けた返事を返したその時、彼女の真後ろにあった工場が崩れ、その瓦礫が襲い掛かった

第四章 望みと激突のページ 8

8

景色が、揺れた。

実際には自分がバランスを崩して視界がぶれたのだけど、それだけではないのでこの表現は正しいと思う。

空以外の風景が、一気に襲い掛かってきたのだから。

しわがれた笑い声が耳を劈く。近い距離で発せられたものが遠くにあると思えるぐらいには、自分はよほど啞然としていたのだろう。逃げ道はない。

まずい、彼女が直感した時には、その猛威は目の前まで迫っていた。

冷や汗が頬を伝い落ちる、そこでなぜルナは彼のことを思ったのだろう。

まるで吸い寄せられるかのように一点に向かって降り注ぐ瓦礫を眺めながら、フレデリックはただ笑っていた。その顔に、今までの「英国紳士」という儼かな雰囲気は微塵も残っておらず、凶悪で狂いきった感情が余す所なく溢れている。

「ぎやははは！ は、はっは！ 馬鹿ですねえ、馬鹿ですよ！ 私が『絶対正義組織^{フリーメイソン}』なんかに寝返ると本気で思っているんですか！？」

それはもう嘲りと言うよりは罵倒にちかいニュアンスだった。

「温室育ちのガキはこれだからいけない！ すぐに人を信用する！

はっは！ 面白い！ その結末がこれですよ！」

そういう言葉がしばらく続いて、瓦礫の流星群はやっとその勢いを止めた。

辺りはすつきりと建物が崩れ落ち、とても見晴らしの良い夜空が映えていた。

白煙で視覚がシャットアウトされたその先にいる少女は、もう原形すら留めていないだろう。

そんなことを予想しながら、フレデリックは瓦礫でぐちゃぐちゃになった足場を突き進む。

「……ほおお」

瓦礫の中には一点だけぽかんと穴が開いたように開けた場所があった。アスファルトが唯一見えるそこには大量の白い羽根が落ちていて、中心には金髪の少女が地面にうつ伏せで倒れこんでいた。

そこから伝う液体が小さな血をつくる唇は、虫の息という言葉が似合うほどの呼吸が続けている。

「あれだけの物をほとんど受け流すほどの羽根を出現させるとは驚きですが、どうやら神力が枯^{マナ}渇しているようですねえ」

神力とは、神術を使う時に必要なエネルギーだ。だがゲームでよく言う「MP」とは違って、これ自体は「HP」と同義。このエネルギーは術者の生命力から精製されている。つまり、術者は術を行使し神力を放出し続けられるほど、自身の体力を削っていくこととなる。今の彼女は体力が尽き果て、ほぼ瀕死の状態になっているのだ。

普通なら過労死する。その疲労の度合いは、一日中寝ず食わずで走り続けた場合に匹敵している。

それでも、彼女は呼吸をしている。

「とつさの判断力、それについてこれる身体能力……なるほど。伊達に個人で地域担当をしているだけのことはあります」

ですが、とフレデリックは続ける。

「メンタル面がまだまだ年相応なようで……。くつくつく……！」

ははは！ 所詮、最後に生き残った方が勝者なのですよ！ 騙しても、裏切っても勝つ、負けることが許されない！ それが魔道！ 平和ボケした神道とは違うのですよ！」

笑いながら、フレデリックはルナの髪を掴み、無理矢理体を起こさせた。

「ぐっ。う……」

ルナが悲痛の声を上げる。それを楽しむかのように、フレデリックの笑い声がさらに増す。

「後悔してますか？ 人を信じた挙句これです。可哀想だから、信じてあげよう、そういう情が生み出した結果がこの失態ですよ！」
苦痛に耐えるルナの口が動く。

「後悔……な、んてしてない。私は……、人を、信じる、道を、選んだんだから」

「人を信じる道？」

はっ、とフレデリックは笑った。そしてその表情が突然険しくなったと思うと、彼はルナの体を地面に叩きつけた。

「がっ！」

「この期に及んでもまだ『信じる』とか綺麗事又かしてんじゃねえぞ小娘があッ！！ 裏切られたんだよ！ てめえは裏切られたんだよ！ あー、くそっ！ イライラさせてんじゃねえ！ 殺す！ すぐ殺す！ 今から殺す！ ツす！！」

自我を見失った雄たけびのような罵声が、ルナの耳を劈く。

フレデリックはサーベルを振りかざす。狙いは頭、詳しく言えば下顎。口を吹き飛ばして、もう二度と喋られない状態で昇天させてやるっ、という理由からだ。

まずい、とルナは体に危険信号を送る。だが、大量の生命力を消費し、必要な器官だけエネルギーを送る彼女の体は、手足なんて末梢部分はぴくりとも動かない。

「死ねやアア ツー！」

奇声を発しながら、フレデリックは勢いよくサーベルを振り下ろした。

ルナは強く目を瞑った。

その後のことは良く覚えていない。

自分が死んだのか、まだ仮死状態の夢の中なのか、とりあえず目を開けることができそうだったから、彼女は少しずつ視界を開けていった。

そこには、白目をむいて気絶　いや、絶命しているフレデリックの体が転がっていた。

「　なッ！」

彼が持っていたサーベルは、持ち主の傍らに転がっていて、血に濡れていないことから、一応自分は止めを刺されていない、ということに悟ったルナは次の疑問に辿り着く。

（一体誰が……！？）

足音が響いた。そちらに目を向けたいところだが、今のルナは首を動かすことさえままならない。

彼女はただ、耳に入っていく言葉を聞き入れることしかできない。「おうおうおう。ナニやってんだよコイツ。んだ？　ジジイだからもっく耄碌してんのかア？　『無重鎧ロゼンステコレの羽飾り』の術者は殺すなつてたろうが。おい、返事しろ……　ってもう死んでんのかア。ハッ。弱エ」

ルナは目を見開いた。

声の主はフレデリックの体を蹴飛ばし、ルナの目の前でしゃがみ込みむと、彼女の顔を覗き込んだ。

「ようようよう。ひっさしぶりだなあオイ。あのガキは元気してたか？　お嬢ちゃん」

デッドバー・リングは、その口の端を吊り上げて笑った。

最近は曇り空が多かったものだから、こんな星の綺麗に映える夜空が見えるのは久しぶりである。

だが、今のルナにはそれを味わうどころか気づく余裕すらない。未だに動かない体、地面に横たわるその先に立つ影に、彼女の神経は集中していた。

「なぜ……、ここに……？」

はっ。とデッドバーはルナの敵意ある視線を気にせず笑う。

「あれだけ暴れりゃ誰だつて気づくだろ。それに、俺はお前に用がある」

「なに……？ お前は、獄魔庵を狙つてここに来たんじゃ……」

ルナの言葉に、デッドバーは目を丸くする。

「……？ ナニ言つてんだお前。なんで俺があんな一般人のガキを殺すためにわざわざ日本に来なきゃなんねんだよ？」

「……え？」

無意識にルナの口が動く。それもそのはず、彼女はあの少年を守るためにここにやってきたのだ。だが、デッドバーの口ぶりだと、あの少年は誰にも狙われていないらしい。

なら、なぜ。

デッドバーは不思議そうな表情のまま続けた。

「ああああア？ イヤ、「え？」とか言われてもなア。つーことはナニ？ お前、勘違いしてたクチ？」

銀の長髪を掻きながら、デッドバーはルナの顔を覗き込む。

「……どうやら、そうみてエだな。道理で見つかりやすいと思った

ぜ」

「……見つかりやすい？」

目の前の相手は何を言っている。何が目的でここに来たのだ。

デッドバーは「くくつ。本当、何も知らねーみてエだな」と笑う。

「お前だよ。厳密に言やあ、お前じゃなくて、その能力『無重鎧の羽飾り』だけどなア」

一瞬、デッドバーの言っていることがルナには分からなかった。
デッドバー達は自分を探していた……？

一層不可解な顔を浮かべるルナに、デッドバーは意地悪な笑みを
つくり、

「いや、お前はまだ知らなくていいんだ。まだ、な」

デッドバーはルナの目の前でしゃがみ込むと、彼女の眼前に手を
伸ばした。

（やられる ……！）

ルナが思ったその時、

「そいつに触んじゃねえよ！」

え？ その声は、ルナとデッドバー、両方が発したものだっ

白煙から現れた影は、呆氣にとられるデッドバーの体突き飛ばす
「がッ！」

そしてそれはルナの目の前に立ち止まり、彼女の手を引いた。

「な、あん、た……！」

「早く逃げるぞ！ ルナ！」

獄魔庵は、こんな時でも助けに来てくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5523e/>

閻魔の日記

2010年10月8日13時08分発行